

令和5年度 国際理解教育 プレゼンテーション コンテスト報告書

International Understanding Presentation Contest 2023

9th December, 2023
TOKI MESSE Niigata Convention Center
International Conference Hall <Marine Hall>



主催：公益財団法人新潟県国際交流協会・新潟県国際理解教育推進協議会

目 次

ごあいさつ 公益財団法人新潟県国際交流協会理事長	中山 輝也	2
国際理解教育プレゼンテーションコンテストに寄せて		
新潟県教育委員会教育長	佐野 哲郎	3
新潟県国際理解教育推進協議会会長	坪井 望	4

I. プレゼンテーションコンテスト

1 コンテストの概要	6
2 発表概要	
・中学生部門	13
・高校生部門	23

II. 台湾スタディツアー

1 台湾スタディツアー 概要	34
2 研修日程について	36
3 スタディツアー 参加者レポート	38

III. 付録資料

令和5年度国際理解教育プレゼンテーションコンテスト実施要項	46
-------------------------------	----

ごあいさつ

公益財団法人新潟県国際交流協会 理事長
中山 輝也



県民の皆様におかれましては、日頃から公益財団法人新潟県国際交流協会の活動にご支援ご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

さて、本コンテストは、若者の国際感覚や国際認識を高め、世界に関心を持ち自ら積極的に考える機会を提供するため2006(平成18)年から毎年開催しており、今年で18回目を迎えました。

今回は、中学生部門5校、10チーム、高校生部門9校、10チームが発表を行い、国際的な問題や国内の課題など、様々なテーマで発表いただきました。会場には125名もの方々からお出でいただき、出場した生徒たちの熱意あふれる姿勢と説得力のあるプレゼンテーションに多くの方々から称賛の声が寄せられたところです。

また、今年から、令和元年以降休止していた副賞の海外スタディツアーを再開することにしました。ツアーでは、今でも台湾の人々に尊敬される日本人である八田與一技師が手掛けた烏山頭ダムを見学し、その偉業を目の当たりにすることにより、参加者たちが深い感銘を受けたことはスタディツアー参加者レポートからも知ることができます。

今年は、日本と中国が平和友好条約を締結して45周年、新潟県と黒龍江省が友好県省協定を締結して40周年の年に当たります。世界では、紛争を始めとした多くの国際問題が存在していますが、先人たちが草の根活動を重ね、築き上げてきた友好関係を引き継ぎ、地域間の国際交流を発展させていくことは、国家間の課題解決の一助になるものと考えています。

柔軟な発想力と行動力を持った若い皆さんが世界の諸問題について考え、発信することは大変意義深いことです。このコンテストをきっかけに、異文化への敬意と日本人としての誇りを持った国際人として、多くの若者が新潟県から世界へ羽ばたいてくれることを期待しています。

終わりに、公平かつ公正な審査にご協力いただきました審査員の皆様をはじめ、本コンテストの開催にあたりご協力を賜りました多くの皆様に厚く御礼申し上げますとともに、今後とも新潟県における国際理解教育の一層の推進のため、ご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

国際理解教育プレゼンテーションコンテストに寄せて



新潟県教育委員会 教育長

佐野 哲郎

現代社会においては、ものごとの規模が国家の枠組みを越えて拡大しており、我々の生活は国際的相互依存関係に支えられています。このような社会においては、一人一人が、国際関係を単に理解するだけでなく、国際社会の一員としてどのように生きていくかという主体性を一層強く意識する必要があります。

令和5年6月に閣議決定された「第4期教育振興基本計画」では、今後の教育政策に関する基本的な方針の一つとして、「グローバル化する社会の持続的な発展に向けて学び続ける人材の育成」が掲げられており、将来の予測が困難なVUCAと言われる時代の中で、個人と社会のウェルビーイングを実現していくためには、社会の持続的な発展に向けて学び続ける人材を育成することや、AIやロボットによる代替が困難である、新しいものを創り出す創造力や他者と協働して問題を解決するといった能力を育成することが必要であるとされています。

また、新潟県・新潟県教育委員会では、「新潟県教育振興基本計画」における施策の一つに、「グローバル社会に対応した教育の推進」を掲げ、日本の文化に対する深い理解を前提として、豊かな語学力・コミュニケーション能力、主体性・積極性、国際理解の精神等を身に付け、様々な分野で活躍できるグローバル人材の育成に努めています。

「国際理解教育プレゼンテーションコンテスト」は、中学生・高校生自らが、国際理解に関する問題意識を持ち、調査・研究を行い、自由な発想で発表することで、高い国際意識とコミュニケーション能力を育成するとともに、国際理解を推進する貴重な機会となっています。このような機会を通じて、本県の中学生・高校生が、多様な文化や価値観を認め合い、国際平和のために主体的に物事を考え、積極的にコミュニケーションを取ることができる、リーダー的資質を持ったグローバル人材へと成長することを期待しています。

国際理解教育プレゼンテーションコンテストに寄せて

新潟県国際理解教育推進協議会 会長
(新潟大学 副学長)
坪井 望



第4期教育振興基本計画（R5/6/16閣議決定）においては、R5～R9年度の教育政策全体の方向性や目標、施策などがまとめられており、国際教育のあり方とも関連性が深いと思われるので、ここで簡単に紹介させていただきます。

社会の現状及び変化として、将来の予測が困難な時代、少子化・人口減少・高齢化、地球規模課題、低い労働生産性・学ばない社会人、国や社会に対する意識の低下、などが挙げられています。これらを踏まえ、今後における2つのコンセプトとして、（1）持続可能な社会の創り手に育成（「自らが社会の創り手となり、持続可能な社会を維持・発展させていく人材の育成」、「主体的・リーダーシップ・創造力・課題設定と解決能力・論理的思考力・表現力・チームワークなどを備えた人材の育成」）、（2）日本社会に根差したウェルビーイングの向上（「多様な各個人が幸せや生きがいを感じると共に、地域や社会が幸せや豊かさを感じられるものとなるよう、教育を通じてウェルビーイングを向上」、「幸福感、学校や地域でのつながり、協働性、利他性、多様性への理解、社会貢献意識、自己肯定感、自己実現等を調和的・一体的に育む」）が掲げられています。（※ウェルビーイングとは、一般的に、身体的・精神的・社会的に良い状態にあることを意味します。）

これら2つのコンセプトの下で、次の5つの基本方針が示されています。①グローバル化する社会の持続的な発展に向けて学び続ける人材の育成。②誰一人取り残されず、全ての人の可能性を引き出す共生社会の実現に向けた教育の推進。③地域や家庭で共に学び支え合う社会の実現に向けた教育の推進。④教育デジタルトランスフォーメーション（DX）の推進。⑤計画の実効性確保のための基盤整備・対話。なお、さらに、16の目標と、それらの目標ごとに、その達成に必要な基本施策及び達成状況を把握するための指標が定められていますが、ここでは省略します。

以上のように、第4期教育振興基本計画の中には、国際教育でもしばしば用いられる用語が、たくさん含まれています。特に、基本方針の①では「グローバル化する社会の持続的な発展」が、②では「全ての人の可能性を引き出す共生社会の実現」が、③では「共に学び支え合う社会」が挙げられています。国籍が異なり、文化背景が異なる多様な人たちと、互いを尊重しながら、一緒に学んで、かつ、教え合い、地球規模及び地域の課題の解決に寄与することによって、個々人の幸せだけでなく、地域や社会が幸せな状態になることが大切だと思います。そのために、自分ができることが何かを考え、皆と話し合っって協力して実行し、その成果を皆で振りかえって、その改善に持続的に取り組み続けていくことも重要だと思います。異なる価値観の接続・融合によって、革新的な創造につながるかもしれません。ぜひ、多文化な共生活動にチャレンジし、深めていってください。

新潟県国際理解教育推進協議会と（公財）新潟県国際交流協会は、県内の中学生・高校生がグループで国際理解を深める機会として、国際理解教育プレゼンテーションコンテストを実施しています。この機会を体験した皆さんが、将来において多文化共生の地域づくりを推進し、地域社会の発展と世界に開かれた新潟県の実現に寄与してくださることを願っています。

I. プレゼンテーションコンテスト

1. コンテストの概要

【日時・場所】

令和5年12月9日（土）12：00～17：00
朱鷺メッセ 国際会議室（マリンホール）

【プログラム】

12：00～14：00 開会式・コンテスト（中学生部門）
14：10～16：00 コンテスト（高校生部門）
16：05～16：25 アトラクション
16：25～17：00 審査発表・表彰式

【審査員】

＜中学生部門＞※敬称略・順不同

上越教育大学大学院 教授	釜田 聡（審査員長）
新潟県教育庁高等学校教育課 副参事（指導第2係長）	佐野 由美子
新潟市観光・国際交流部 部長	関川 丈彦
公益財団法人 AFS 日本協会新潟支部 支部員	山際 由記子
株式会社新潟日報社 報道部 論説編集委員	阿部 慎一

＜高校生部門＞※敬称略・順不同

新潟県国際理解教育推進協議会会長/新潟大学副学長	坪井 望（審査員長）
新潟県教育庁義務教育課 副参事（指導第2係長）	相田 巧
公益財団法人柏崎地域国際化協会 事務局長	山本 睦子
独立行政法人国際協力機構 東京センター（JICA 東京）所長	田中 泉
株式会社新潟放送 報道制作局報道部 部長	酒田 暁子



【司会】

中津川 英子（アナウンサー）

【アトラクション】

インドネシアのダンス ナンダク踊り
アデ リズキ ヒュセイノブ ルビス

【出場チーム】

	チーム名	タイトル
中学生部門		
1	GLOCAL 部 C チーム (県立燕中等教育学校)	子どもの権利～みんなに平等な時間～
2	竜 Guuu 城 (新潟市立下山中学校)	食品ロス削減をめぐる冒険～助けたカメに連れられて～
3	GLOCAL 部 A チーム (県立燕中等教育学校)	Challenged
4	水先案内団 (新潟明訓中学校)	水～汚れる浜と私たち～
5	Étoile (新潟市立早通中学校)	えがおのセカイ
6	臼井中学校 (新潟市立臼井中学校)	争いの先にある未来 ～ウクライナ侵攻とイスラエル・パレスチナ紛争からの考察～
7	Galileo (新潟明訓中学校)	グローバル化による“個”の喪失
8	GLOCAL 部 B チーム (県立燕中等教育学校)	衣服が抱える様々な問題
9	Project “S” the Final (新潟市立下山中学校)	多文化共生のヒントは靴？～あるスケッチブックの物語～
10	ぱれっと。(新潟明訓中学校)	ジェンダー平等の意味、はき違えてない？
高校生部門		
1	ガーナとカカオ工場 (県立十日町総合高等学校)	児童労働～ガーナのカカオ生産～
2	ドリームトリオ (県立高田高等学校)	学びってなあに？
3	目黒商事 三条支店 (県立三条商業高等学校)	カレーを売って、食べて、みんなが happy!～目黒商事のミッション～
4	台湾行こう ^ v ^ の会 (県立糸魚川高等学校)	世界の果てまで行って食うー！～各国の主食スペシャル～
5	名探偵の合言葉 (上越高等学校)	PAQ
6	Bamboo (県立村上中等教育学校)	Yo!You!～Which do you wanna buy?～
7	地球人 (新潟明訓高等学校)	難 mean
8	GLOCAL 部 (県立燕中等教育学校)	言語の壁～気持ちがあれば誰にでも～
9	北越高校 English Club (北越高等学校)	“Make Up”Your Mind! -校則でメイクを許可すべきか-
10	上越高校 柔道部 (上越高等学校)	ハグは柔道を救う。

【中学生部門】

○最優秀賞

臼井中学校（新潟市立臼井中学校）「争いの先にある未来～ウクライナ侵攻と
イスラエル・パレスチナ紛争からの考察～」

○優秀賞

Project “S” the Final（新潟市立下山中学校）「多文化共生のヒントは靴？
～あるスケッチブックの物語～」

Galileo（新潟明訓中学校）「グローバル化による“個”の喪失」

○審査員奨励賞

Étoile（新潟市立早通中学校）「えがおのセカイ」

【高校生部門】

○最優秀賞

地球人（新潟明訓高等学校）「難 mean」

○優秀賞

名探偵の合言葉（上越高等学校）「PAQ」

ドリームトリオ（県立高田高等学校）「学びってなあに？」

○審査員奨励賞

目黒商事 三条支店（県立三条商業高等学校）「カレーを売って、食べて、みんなが happy!
～目黒商事のミッション～」

【参加者名簿】

中学生部門 ※学年は令和5年度12月9日現在

チーム名	学校名・組織名	学年	メンバー	指導者
水先案内団	新潟明訓中学校	3	土屋 信昂	教諭 服部 暁 教諭 山本 祥寿
		3	澤井 玄	
		3	飯嶋 冴華	
Galileo	新潟明訓中学校	3	伊藤 萌奈美	教諭 小林 伸子 教諭 山本 祥寿
		3	井上 迪姫	
		3	関川 桂鈴	
ぱれっと。	新潟明訓中学校	3	堀口 未央那	教諭 柳沢 基紀
		3	川上 ゆう香	
		3	寺久保 美樹	
		3	江口 音桜	
GLOCAL部 Aチーム	新潟県立燕中等教育学校	3	本間 光流	教諭 中山 裕子 教諭 北原 朋子
		3	近藤 陽菜乃	
		3	本田 優月	
		3	田中 結愛	
		3	有波 珀翔	
GLOCAL部 Bチーム	新潟県立燕中等教育学校	3	伊藤 遼亮	教諭 中山 裕子 教諭 北原 朋子
		3	清水 縁	
		3	野中 耀大	
		3	木原 康児	
		3	土田 鈴音	
GLOCAL部 Cチーム	新潟県立燕中等教育学校	3	吉田 彪将	教諭 中山 裕子 教諭 北原 朋子
		3	富田 沙帆	
		3	石山 珠生	
		3	大橋 歩夏	

チーム名	学校名・組織名	学年	メンバー	指導者
臼井中学校	新潟市立臼井中学校	3	田中 沙瑛良	教諭 小出 秀人
		3	片野 ゆら	
		3	栗賀 亜門	
		3	鳴澤 顕	
Project “S”the Final	新潟市立下山中学校	3	浜松 咲也	教諭 山崎 寛己
		3	馬場 叶多	
		3	村山 紗良	
		3	本間 琴子	
		3	板垣 はな	
竜Guuu城	新潟市立下山中学校	2	青池 里和	教諭 山崎 寛己
		2	笠原 由那	
		2	亀貝 洸太	
		2	奥崎 香澄	
Étoile	新潟市立早通中学校	2	青島 雛夕	教諭 鈴木 雛琴
		2	石井 直花	
		2	駒澤 桃羽	
		2	齋須 梨里彩	

高校生部門 ※学年は令和5年度年12月9日現在

チーム名	学校名・組織名	学年	メンバー	指導者
名探偵の合言葉	上越高等学校	1	金谷 青空	教諭 馬場 朱里
		1	河南 愛子	
		1	小林 詩	
		1	小松 果穂	
		1	宮越 美優	
上越高校 柔道部	上越高等学校	1	中村 将梧	教諭 木下 幸彦
		1	白川 真利奈	
		1	平野 司	
台湾行こう^^の会	県立糸魚川高等学校	1	木島 大	教諭 中野 聡
		1	安田 悠人	
		1	荻野 滯	
		1	松木 海斗	
ガーナとカカオ工場	県立十日町総合高等学校	3	勝又 麻友子	教諭 佐藤 良子 講師 マクレラン 牧子
		3	貝瀬 夏望	
		3	田村 凜	
Bamboo	県立村上中等教育学校	5	高橋 風花	教諭 笹山 恵湖
		5	齋藤 初葵	
		5	鈴木 アイシス	
		5	井浦 菜瑠	

チーム名	学校名・組織名	学年	メンバー	指導者
北越高校 English Club	北越高等学校	2	深澤 ひな乃	教諭 関 洋介 常勤講師 ヘイル 利音
		2	宮澤 仁菜	
		2	長谷川 心和	
		2	山下 芙優果	
		1	八幡 望	
地球人	新潟明訓高等学校	2	本図 幸大	教諭 牧井 智生
		2	笠原 瑞歩	
		2	中島 菜乃加	
目黒商事 三条支店	県立三条商業高等学校	1	青木 心奏	教諭 目黒 正栄 教諭 市川 操
		1	伊藤 美羽	
		1	五十嵐 心	
		1	阿久津 靖葉	
		1	落合 航太郎	
GLOCAL部	県立燕中等教育学校	2	羽賀 詩彩	教諭 中山 裕子 教諭 北原 朋子
		2	西岡 歌音	
		2	伊藤 真菜	
		2	森山 日鞠	
		2	近藤 萌香	
ドリームトリオ	新潟県立高田高等学校	1	草間 春花	教諭 金子 賢太郎
		1	木島 颯希	
		1	藤田 孝太郎	

2. 発表概要

【中学生部門】最優秀賞

臼井中学校（新潟市立臼井中学校）

「争いの先にある未来
～ウクライナ侵攻とイスラエル・パレスチナ
紛争からの考察～」



今年の8月19日のニューヨークタイムズでは、ウクライナ・ロシア両軍の死傷者が50万人に迫ると伝えられました。毎日報道されるニュースやSNSでアップされる現地の情報、さらには、死傷する子供たちの悲惨な姿に私たちは日々心を痛めています。もう2年になる、ウクライナ侵攻。自分たちにできることはないかと毎日ネット検索するたびに、拡大する被害の凄さに、これは他人事ではなく、少しでも戦争で困っている人の役に立ちたいと思うようになりました。

戦争で苦しんでいる人々のために、まず始めに行動したことは、太平洋戦争のあと、当時の方々がどのように日本を復興していったかを知ることでした。今、世界中で起きている戦争が1つ1つ終わるごとに、日本の戦後の復興をお手本にできないかと考えました。

そこで、私たちの地元、新潟市南区に住む90歳以上の高齢者の方々に、復興の様子やそのときの気持ちを伺い、映像に残す活動をはじめました。地域の高齢者の皆様から伺った話では、新潟市南区で、電気、ガス、水道のインフラがどのように普及していったか。戦中から戦後にかけての食糧事情。また、その頃は砂利道だった国道や県道のこと。さらに、多くの方から、これからの生き方につながるメッセージをいただきました。

そんな中、イスラエルによるガザ侵攻が開始されました。イスラエル軍の空爆による犠牲者は増え続け、昨日までに死者17,000人以上、さらに負傷者は46,000人を超え、「人々は絶望の中にいる」と報道されています。(12月8日時点)プレゼン準備の最中に突然はじまったイスラエルによるガザ地域への侵攻。もうこの争いが自分の中で他人事ではありませんでした。

そこで私たちは日本でパレスチナを支援する2つの団体とZOOMでやり取りをしました。1つは「BDS JAPAN」というパレスチナ支援団体。そして、もう1つが京都大学の学生を中心としたパレスチナ支援団体の「SHIRORU」です。

BDS JAPANの役重さんのお話では、今回のことは何の理由もなく起きたわけではなく、以前からパレスチナはイスラエルによる武力封鎖の中で生活を余儀なくされてきたと長年の占領政策を非難していました。また、紛争終了後の復興には「個人の個性や違いをそれぞれ話し合いながらの団結が必要だ」という話が心に残りました。

また、SHIRORUというパレスチナを支援する団体とのZOOMミーティングでは、「どの国も、どの人々も結局は利益を第一優先してしまう。今の加速する資本主義社会では、戦争で誰かが死ぬことより、自分や国益を優先してしまい、この先も戦争は次々と起こり、数え切れない悲しみが世界を覆ってしまう。」

というイメージを共有し合い、この先、まったく新しいもの
の見方考え方が必要だと感じることができました。

争いの先にある未来は、平等で、夢と幸せに溢れる世界であるべきです。もし、加速する資本主義や利益の追求が、多くの苦しみや悲しみを生み出し、破滅と絶望の紛争へとつながるなら、私たちは「全く新しい資本主義の形」、そして、「それに伴う新しい価値観」を全力で生み出していかなくてはなりません。

「すべての人々が互いを尊重し合える社会」そして、「世界中の人が自分の大切なものを大切にできる世界」を、今、ここにいる私たちから一歩ずつ創り上げていきましょう。



【中学生部門】優秀賞

Project “S” the Final (新潟市立下山中学校)

「多文化共生のヒントは靴？ ～あるスケッチブックの物語～」



連日流れてくる差別に関するニュース。私たちは「差別」を題材とした道徳の授業で、在日コリアンの方々へのヘイトスピーチに関する映像を見て衝撃を受けました。実際に起きているこのような現実を目に向けなければ、と考え活動を始めました。

私たちは、多文化共生学習会を実施してきました。海外にルーツのある方々、京都精華大学元学長のウスビ・サコさんから、多文化共生をテーマとした講話をしていただきました。そして、実際に新潟朝鮮学校や川崎ふれあい館に取材に行き、共生社会をつくる上で大切なことを知るほか、今でもヘイトに苦しんでいる人がいるということを改めて認識し、偏見は差別に繋がり、差別から生まれるものは何もないと改めて実感しました。私たちは講師の方々「多文化共生を考える上で、共に生きるために大切なことは？」と言う質問を投げかけ、その答えを、スケッチブックに書いてもらいました。川崎ふれあい館・館長の崔江以子（チェ カンイジャ）さんの答えは、「違いは豊か、前へ前へともに」でした。一人ひとりに個性があるので相手を知ることから始め、自分も相手も自分らしく幸せに生きていくために、差別をなくす行動をすることが大切だと知りました。

「他者の靴を履く」この言葉は多文化共生を考える上で出会った大切な考え方です。

ここでの靴の定義は自分や他者の個性や心情や培われてきた考え方のことです。それを踏まえて「他者の靴を履く」とは他人の靴を履くように他人の立場に立って物事を考えるという意味です。これは他者の感情や経験などを理解する能力「エンパシー」につながります。誰かの靴を履くためには自分の靴を脱がなければなりません。人間は顔が見える人の靴は履けても、顔が見えない人たちの靴はあまり履こうとしないものです。だからこそ他人と共生するためにはエンパシーを身につけ、知ろうとすることが大切なのです。

最後に、私たちが辿り着いた態度は「全員を特別扱いする」ことです。一人ひとりニーズは違うため、全員に自分のあったやり方で接していく。人が当たり前のように持っている偏見が少しでも変わることによって多文化共生につながり世界全体が豊かな場所になります。この豊かさが今世界にある偏見を、いじめを、差別を、ヘイトをなくすことができるのだと私たちは思います。



【中学生部門】 優秀賞

Galileo (新潟明訓中学校) 「グローバル化による“個”の喪失」

最近、街を歩いていると、ファストフード店やビルなど、近代的な建築物が多く目に留まります。また、道行く人の服装も似たようなものばかりです。一方で、伝統的な家屋や着物を着た方はあまり目にすることができません。そこで、私達はグローバル化の文化に対する影響を考えました。グローバル化を、人やモノ、お金が、国境を越えて流れていくことと定義すると、観光客の増加、外国文化の輸入、比較的安い外国産製品の輸入など多くのメリットがあります。しかし、それに影響された結果、日本独自の文化が廃れてしまう可能性もあります。その過程で私達は、「グローバル化を勧めながら伝統文化を残していくにはどうしたら良いか」という問いを立てました。

そこで私達は、身近な亀田の伝統的な布である亀田縞に目をつけました。

まずはじめに、亀田縞の認知度についてアンケート調査を行いました。その結果、亀田縞を知っている人は全体の約二割、その大半が亀田縞を知ったきっかけを学校であると回答しました。また、亀田縞を知っていると回答した人のうち、興味があると答えた人が過半数を超えていました。以上より、伝統工芸品の認知度が低い原因として日常的に触れる機会が少ないこと、また、伝統工芸品について知るには興味が必要である可能性があることがわかります。

次に、亀田縞を販売している亀田繊維工業協同組合に企業見学に伺いました。加えて、3社にメールを送り、回答をいただきました。伝統文化を残すにはどうしたらいいか、と伺ったところ、どの会社の方も「たくさんの人、特に、若い方に知ってもらうことが大切」と答えてくださいました。

以上のことから、グローバル化を進めるとともに伝統文化を残していくために重要なことは3つあると考えます。

一つ目は知ることです。伝統文化に興味を持ち、知識を持つことで伝統文化を残していく足がかりにすることができるのではないのでしょうか。

二つ目は、伝統文化に興味を持つことです。興味を持つことで伝統文化に関する情報に触れる機会が多くなります。このことが一つ目の「知ること」に繋がっていくと思います。

三つ目は閉鎖的にならないことです。なぜなら、外国の文化を受け入れることは、私達にとって素晴らしい利益になるからです。よって、私達は自分達の文化をよく知り、発信し、また、外国の文化を受信することが大切であると考えます。



【中学生部門】 審査員奨励賞

Étoile（新潟市立早通中学校）

「えがおのセカイ」



来年度から早通中学校の制服が新しくなります。変更の理由は、「早中生の個性や多様性をより尊重するため」です。そこで私たちは「LGBTQ」や「トランスジェンダー」について詳しく調べ始めました。

まず、私たちは何ができるか考え、今の中学生のLGBTQへの理解度を知らするために全校生徒にアンケートを取りました。質問事項はLGBTQに関する認知度や考えについて問う項目を入れました。結果は、「LGBTQに興味・関心がある」、「少しある」と回答した人は全体の47%でした。全体の半数以上の生徒がLGBTQについて関心を持っていないことが分かりました。この結果を受け、まずは私たちからLGBTQやジェンダーについてより理解を深め、学んだことを伝えなければいけないと思いました。そこで私たちはジェンダーをテーマにした講座を聞きに行き、講義やグループワークを通してジェンダーについて学ぶことが出来ました。

学んだことをもとに、2つの活動をしました。1つ目はLGBTQへの理解を深められるような資料を作成し、全校の生徒に見てもらいました。また、「誰もが笑顔で過ごせる学校」にするにはどんなことが必要か班で考えました。その後事後アンケートをとり、前後でどのように考えが変化したのかを調べました。「LGBTQに興味・関心がある」と答えた生徒は全体の84%で、全校の8割以上の生徒に興味・関心をもってもらうことができました。記述の質問では、多様化に向けて前向きな意見がたくさん出ました。

2つ目の活動は、「もし近くにLGBTQの人がいたら…」という状況をイメージしやすいようにするため、トランスジェンダーをテーマにした漫画を製作しました。漫画は早通中学校のホームページに掲載しています。

今回調べてみて、身近にも生きづらさを感じている人がいるかもしれないということが分かりました。私たちにできることは気遣いや思いやりを大切にし、カミングアウトしやすい環境を作ることです。たくさんの方が行動を起こし、誰でも過ごしやすい世界にしていきたいです。

「エトワール」これは私たちのチーム名で、フランス語で星を意味しています。私たちはチーム名に「この地球に住む誰もが夜空に輝く星のように光り輝けますように」という願いを込めています。星は、大きさも色も様々です。私たちも星と同じようにそれぞれ見た目や性格が違い、同じ人は存在しません。だからこそ、女や男、LGBTQの人など関係なく光り輝けたら、美しい夜空になると思います。みんなが笑って楽しく過ごせる「えがおのセカイ」を作るために私たちはこれからも活動していきたいです。



【中学生部門】

GLOCAL 部 C チーム（県立燕中等教育学校） 「子どもの権利～みんなに平等な時間～」



私達学生は、毎日あたり前に学校に通い、あたり前に学習しています。では、これが「家の手伝い」を理由に、あたり前にできない子どもがいたらどうしますか？自分には関係のないことだと思う人もいるかもしれませんが、そのような子が私達の周りにもいる可能性があるのです。私達は自分達の生活と彼らの生活とのギャップに驚き、問題になっていることを調べ、自分達にできることを考えてみました。

手伝いを理由に学校に行けない子どもたちは「ヤングケアラー」と呼ばれています。彼らは学校に行けないことが多いため、十分な社会経験が積みません。そのため、社会に出た時に、多くの困難にぶつかります。そして、これは子どもが持つ「育つ権利」の侵害にあたります。このようなケースが減ってほしいのですが、実際、年々増えていく一方です。理由は、ヤングケアラーの発見の難しさにあります。ヤングケアラーは、デリケートで踏み込みにくい話題であり、「手伝い」という誰の日常にあってもおかしくないことが、さらに定義の難しさを跳ね上げています。私達は自分達にできることを考えるため、他国におけるヤングケアラーの実態について調べてみました。

イギリスでは、ヤングケアラーの定義があり、その保護も手厚くなっています。結果として、ヤングケアラーが埋もれにくくなっています。加えて、ヤングケアラーが人々に広く認知されています。そうです、日本とイギリスとの大きな違いは、ヤングケアラーの認知度にあります。実際に日本では、介護業界の求人サイト“みんなの介護求人”の「ヤングケアラーを知っているか」というアンケートに対し、「知らない」と答えた人が半数以上を占めていました。このことから、まずはヤングケアラーに関する認知を広げていくことが、今の私達に出来ることだと考えます。ヤングケアラーに関する認知を広げることで、人々の意識が高まり、ヤングケアラー自身も、自分がヤングケアラーであることに気づく機会が生まれます。

ただ、少数で認知を広げていくのはとても難しいです。そのため、ヤングケアラーを知っている人がヤングケアラーに関する情報を広げ、その情報を受けた人達が、さらに情報を広げていくというサイクルを回すことが重要です。一人一人の行動が、少しずつヤングケアラー問題を解決していくのです。私達で、一人でも多くのヤングケアラーが救われる社会にしていきたいと思います。



【中学生部門】

竜 Guuu 城（新潟市立下山中学校） 「食品ロス削減をめぐる冒険 ～助けたカメに連れられて～」



現在の私たちは、いつでも安心安全な食品が手に入ります。一方で、売れ残りや食べ残しなどで大量の食品が廃棄されているのも現状です。買いすぎたり、作りすぎたりしてしまい、食べきれず結局廃棄する悪循環に陥っています。廃棄されることによって焼却する際に二酸化炭素が生じます。これも地球温暖化を引き起こす原因の一つです。そこで私たちは「食品ロス削減」に向けて3つの取り組みを行いました。

はじめに、新潟商業高校へ取材に行きました。学校では賞味期限切れの食品を安価で購入し、安価で売る取り組みを行なっていました。「賞味期限切れの食品は食べられないのでは？」と思った方もいると思います。賞味期限は美味しく食べられる期間、消費期限は安全に食べられる期間。つまり賞味期限切れのものは食べることができます。商業高校の方は賞味期限と消費期限の違いをよく理解してほしいとおっしゃっていました。また、ぱくぱく食べてロスが減らそうという「ぱくロス」という独自の言葉を広め、学校内でも意識が高まるような活動を行っていました。

次に、おにぎりアクションを行いました。おにぎりアクションとは、おにぎりの写真を撮って SNS に投稿すると、協賛企業により一枚につき5食分の食品が寄付されるという取り組みのことです。食品は世界の恵まれない方へ届けられます。途上国では先進国とは異なり、食品が手に入りづらい現状もあるため、おにぎりを作ることで世界を支援することもできます。そして私たちはこの取り組みを広めたいと思い、全校集会を開いておにぎりアクションについて説明を行い、全校生徒におにぎりの写真を撮ってもらうよう呼びかけました。様々な人のご協力により、約 140 枚の写真が集まり、下山中学校からは 700 食相当の寄付をすることができました。

最後は下山フードドライブです。フードドライブという言葉は一度は耳にしたことがあるかもしれません。フードドライブとは家庭で余った食品を持ち寄り、寄付することです。これは寄付する人も寄付される人もお互いにとって良い取り組みです。私たちは企画を練り、ここでも全校集会を開いて呼びかけを行いました。そして二日間にわたって「下山フードドライブ」を実施しました。生徒、教職員、地

域の方々の協力もあり、約 80 食の食品が集まりました。そして新潟市にある社会福祉協議会に寄付しました。集められた食品は子ども食堂やフードパントリーに届けられます。

これらの活動は一見難しそうに思うかもしれませんが、ですが、賞味期限や消費期限について理解するのも「食品ロス削減」の取組の一環だと思っています。一人一人が当事者として考え、意識し、行動することで「食品ロス削減」につながるのではないのでしょうか。



【中学生部門】

GLOCAL 部 A チーム（県立燕中等教育学校） 「Challenged」

私達は障がい者の働き方をテーマにしたドラマをきっかけに、日本と世界における、障がい者の「雇用」と「イメージ」の違いを比較しました。

まずは、障がい者の雇用についてです。障がい者のための支援制度の存在を知った私達は、燕市にある障がい者の就労支援施設「あったかハート」と「夢工場つばめ」を訪れました。これらの施設では、障がいを持った方々が各々の特性を活かせる仕事に就けているということと、施設のスタッフが労働者の心のケアまで行っているということに感銘を受けました。

次に私達は、日本とドイツの雇用制度について調べました。制度上の障がい者の雇用の割合は、日本よりドイツの方が大きく、法定雇用率も実雇用率も、ドイツは日本の倍以上です。

私達は同級生に、障がい者の雇用に関するアンケートを取りました。「就労支援施設を知っているか」という質問に対し、「いいえ」という回答が半数以上を占めたものの、「はい」という回答が想像以上に多く、意外な結果となりました。

次に、障がい者に対するイメージについても調べてみました。内閣府ホームページのデータによると、日本では、障がい者を意識して接するという人が6割もいることがわかりました。一方、アメリカではそのような人がたった1割と、障がい者に対する接し方が国によって大きく異なることがわかりました。

さて、私達のプレゼンタイトル“challenged”ですが、これは「障がいを持つ人」を意味する、新しい米語です。この言葉には「障がいを持つがゆえに体験することを、自分や社会のためにポジティブに生かそう」という想いが込められています。障がい者を意味する“disabled person”ではなく、この言葉が使われ始めているということは、アメリカにおける障がい者に対する認識が変わってきていることがわかります。日本でも「障害者」の「害」がひらがな表記になるなど、障がい者に対して配慮する動きが出てきました。この動きがさらに広がれば、皆が生きやすい社会を目指せるのではないのでしょうか。

私達は今回の学びを通して、障がい者の方も、自分達と『同じ』であるということから、特別な意識を持たずに接することが大切だと考えました。今日12月9日は「障がい者の日」です。私達の発表が少しでも皆さんの心に届いていますように。



【中学生部門】

水先案内団（新潟明訓中学校） 「水～汚れる浜と私たち～」



日本の中でも新潟は海との接地面積が広く、海は生活や文化と密接に関わっています。そして地球の7割を占め、多くの人々の生活に関わっている海を通して新潟や世界について考えることができると思い、今大会でのテーマを海としました。

まず、海の現状を知る必要があると考え、BSN新潟放送の海と日本プロジェクト in 新潟の西山さんに海の現状についてインタビューしました。環境省などのデータを用いて、プラスチックゴミを中心に海洋ゴミが出ていることや、ゴミの処理に多くのお金がかかっていることを知りました。さらに西山さんは、毎朝日和浜で海岸清掃をしていて、その際に出たゴミを見せてもらいました。プラスチックや釣り用具は予想した通りでしたが、今年は注射器のゴミが増えていたこと、外国製品のゴミが漂着していたこと、農薬や散弾銃の薬莖など川の上流から流れてきたと思われるものがあることなど、興味深い事実を知ることができました。実は海洋ゴミの多くは陸から出ているらしいのです。この現状を知り、私たちも何か行動したいと考え、西山さんと11月3日に海岸清掃を行いました。清掃を行い始めてすぐに、あまりにもゴミが多いことに愕然としました。爪の先ほどの小さなプラスチックゴミが無限とも思えるほど砂に混じっています。それらは残念ながら諦め、拾えるゴミを回収することにしました。2時間程度でゴミ袋にして10袋程度がいっぱいになり、ゴミ袋に入らないほど大きなマットやブイなどのゴミも拾いました。ちゃんと目を向けるだけで、現状の厳しさを感じるということがわかりました。

また、しばらくして学校に講演に来てくださった長岡技科大の教授で内閣府にもお勤めの中山忠親先生に問題解決の方法についてお聞きしました。問題は大きいので、水平思考が大事だということでした。水平思考とは、問題解決のために常識や既存概念にとらわれずに自由な発想でアイデアを生み出す思考方法のことです。例えば、ゴミを大きさや種類ごとに分けて考えたり、ゴミがそもそも出ないようにする方法を考えたりなどして、さまざまな視点から考えました。最終的には危機感を持って日々行動することが大切という結論に落ち着きました。

コンテストでは実際に存在する船のパイロットなどを務める水先案内人から着想を得て、海岸清掃などで海を守る水先案内団の団長と2人の団員が海洋ゴミ問題の解決について考えるという劇形式の発表を行いました。私たちはこの活動を通して、海洋ゴミは私たちの生活から出ているということを知り、

きちんとした日常生活を送ることを大切にしていきたいと思っています。



【中学生部門】

GLOCAL 部 B チーム（県立燕中等教育学校） 「衣服が抱える様々な問題」



私達は以前から、着なくなった服を捨てることがもったいないと感じていました。何かできないかと調べてみたところ、衣服に関する様々な問題を知りました。

例えば、現代のファッションの主流である“ファストファッション”と呼ばれる業態は、トレンドのサイクルが非常に早く、トレンドが終わった衣服の多くは廃棄されるため、衣服の大量廃棄が深刻な問題となっています。

また、現在日本で売られている衣服のうち、80%程度が発展途上国からの輸入品ですが、そこでは服を作る工場の労働環境が極めて劣悪で、賃金も少なく、これも深刻な問題になっています。

このように、衣服産業には、私達が知らない、様々な「裏」があるのです。

この現状を知った私達は、衣服産業の問題に対して、自分達にできることを考えてみました。

まずは、3R (Reduce, Reuse, Recycle) を意識することです。私達は日頃から衣服を必要な分だけ購入したり、古着を積極的に購入したり、衣服の回収サービス、寄付を利用したりすることで、3R活動に貢献することができます。結果的に、高まりすぎている衣服のニーズを抑えることができ、生産量も減り、資源も削減することができます、それが環境問題の解決策につながると考えます。

次に、衣服の素材についてです。私たちが普段身に着けている衣服の主な素材は、化学繊維です。化学繊維は季節に関係なく大量生産が可能で、乾きやすいというメリットがありますが、この素材を扱う生産者の健康に害をもたらすという、デメリットもあります。

これに対し、私たちが考えた解決策は、オーガニックコットンの栽培を広め、オーガニック素材の服を着る、ということです。オーガニックコットンを栽培するメリットとしては、安全性に配慮した栽培法であるため、土壌や水質の汚染が少なくなることが挙げられます。実際に私達は、燕市でオーガニックコットンを栽培する農家を訪ね、取材をしてきました。農家の方から話を聞き、改めてオーガニックコットンの栽培を進めていくべきだと実感しました。

私達が全校生徒に調査したアンケートによると、「服の原料を気にしている人」は4%、「やや気にしている人」は21.7%、「オーガニック素材を使ったことがある人」は39.2%、という結果が出ました。



私達一人一人が少しでも素材を意識して衣服を買うことで、この割合はもっと上がっていくはずです。一人一人が衣服に関する意識を高め、衣服産業をより良いものにしていきましょう。

【中学生部門】

ばれっと。(新潟明訓中学校) 「ジェンダー平等の意味、はき違えてない？」



ジェンダーとは「社会的、文化的に作られた男らしさ、女らしさ」という性差のことです。これらの差を無くすことをジェンダー平等と言います。私たちは新潟日報の平賀記者にジェンダーについて詳しく教えていただき、私たちが毎日着ている制服にもジェンダー問題があるということを知りました。私たちの学校の制服は、男子は学ラン、女子はブレザーで、女子の制服には一部ジェンダーレス化がみられます。しかし、男子は選択肢がなく学ランのみです。そこで、私たちは制服に関するイベントで性のあり方やジェンダーレス制服について教えていただき、性のあり方は人によって該当する範囲が異なることがわかりました。

そこで私たちはもっと LGBTQ の方のお話を聞き、問題についての視野を広げたいと思い、インタビューさせていただきました。特にトランスジェンダーの人たちは男性がスカート履きたいと思ったり女性が学ランを着たいと言ったりすると心の性別と実際の見え目が違う違和感が生まれ、大きな苦しみに繋がるとおっしゃっていました。このインタビューや、新潟日報に記載されていた、新潟県内の高校で女子用の制服を着たい男子生徒の要望に対して周りの理解が得られず、その男子生徒は転学したという記事を通して、性の多様性が広がっていく中で、このような現状があってはならないと実感しました。私たちはジェンダーレスのものに統一するのは本当に悩んでいる人のためになっただけでなく、ジェンダー平等のはき違いだと考えます。大事なことは一人ひとりが自分らしさを大切に、身につけたいものを身につけられる社会にすることが大事だと考えました。

そこから私たちにできることは、LGBTQ の問題について知る・理解する・自分が理解者であることを示すことだと思います。虹色を身につけることで当事者の方に理解者であることを示せる ally(アライ)になり、味方がいるということを示すことも大切です。私たちはみんなに知ってもらうことが大切ということを知り、学校の図書室に LGBTQ のコーナーを作りました。まずは私たちの学校のみみんなに知ってもらい、広がるきっかけを作りました。

私たちの考えるジェンダー平等のゴールは男女、LGBTQ 関係なく、互いに尊重し合い、一人一人が自分らしくいられるということだと思います。これからも今回学んだことを通して学校や社会で全ての人が暮らしやすくなるような取組をしていきます。



【高校生部門】最優秀賞

地球人（新潟明訓高等学校）

「難 mean」



情報難民や買い物難民といった、語尾に難民とつく言葉を私たちは多用しています。これらの言葉において難民は、貧しい人々というネガティブな意味で使われています。そして、これらの意味はそのまま私たちの難民に対するイメージを象徴しているのです。実際、私たちの学年で実施したアンケートでは、大半が難民に対してネガティブなイメージを持っていました。これらのネガティブなイメージは、難民に対する偏見や思い込みにつながる可能性があります。では、どう捉えれば良いのでしょうか。私たちは、難民について調べを進める中で、難民の持つ「希望」に着目するに至りました。難民はネガティブな存在ではなく、希望を持って生きる一人の人間であることに気付かされたのです。

そもそもなぜ、私たちは難民に対してネガティブなイメージを持ってしまったのでしょうか。原因として着目したのが、情報です。同じ出来事でも、切り取り方によって情報の伝わり方は異なってきます。難民をネガティブに捉える記事や写真をよく目にするにより、私たちは難民を単純にネガティブな存在だと思い込んでしまっていたのです。これらを解決するため、情報化が進む今を生きる私たちは、様々な視点で物事を捉えなければなりません。そのために、一つの情報だけを過信せずいろいろなツールを使って積極的に情報を得て、比較することが求められているのです。

ここまで読んでこのように思った方もいるのではないのでしょうか。難民という大きな問題を、私たちが考える意味があるのか、国際機関に任せた方がいいのではないかと。しかし、私たちは11月に開かれた模擬国連会議に参加し、私たち一人ひとりが行動することの重要性を痛感しました。国連等の大きな組織では、全体の意見を取りまとめ、一枚岩になって実効性のある行動をすることは非常に難しいのです。だからこそ、私たち一人ひとりの「情報を精査し、偏見や思い込みをなくす」という小さな行動がとても重要なのです。新潟でも、ウクライナから避難されている方が講演会を行っていたり、難民をテーマとした映画を放映する難民映画祭が放映されていたりしています。これらのイベントはまさに、難民に関する情報に触れ、イメージをはじめとする難民に関する認識を改める機会となります。私たちは実際に、このプレゼンを作成する過程で、ウクライナ避難民である

ミロンチューク・ヴィクトリアさんにお話をお聞きしました。新潟にいる高校生である私たちでもできることはたくさんあります。皆さんも、この大きな問題を解決するための1歩を踏み出してみませんか。



【高校生部門】 優秀賞

名探偵の合言葉（上越高等学校）

「PAQ」



講演会で「会場の皆さん、何か質問のある人はいますか」と聞かれたら、あなたは質問しますか？しませんか？

私たちは今年の夏に留学生と一緒にプレゼンテーションをつくって発表する活動を行いました。この活動で一番印象に残っているのは、質疑応答の時間です。日本では質疑応答で手を挙げる人はほとんどいないのですが、この時は留学生からどんどん質問が出てきて、活発に議論が交わされていました。そして、「ひょっとして、質問する方が世界のスタンダードなのではないか」と感じました。

そこで、私たちは聞き取り調査を行いました。アメリカに留学中の友人や、英語の先生に聞いてみたところ、やはり外国では質問する人が多いとの回答でした。さらに、私たちは実際に外国人学生と一緒に授業を受けてみることにしました。国際大学で行われた異文化コミュニケーション研修に参加し、外国人学生と一緒に授業を受けてみましたが、外国人学生は皆積極的に質問をしていました。やはり、質問することが世界のスタンダードのようです。

「質問することが世界のスタンダードなのであれば、私たちも質問しないと！」と思ったものの、すぐに質問できるようにはならないと感じたので、私たちは質問する練習をすることにしました。授業や講演会など、色々なところで質問するようにしました。最初はちゃんと質問できるか心配でしたが、「質問しよう！」と意識しながら話を聞くことで、どんどん疑問点が出てきました。いつもは眠たくなってしまいう授業や講演会も最後まで集中して話を聞くことができました。さらに、自分の質問することで講師の方や先生と話すことが出来ることも嬉しいと感じました。質問する練習を通じて、質問することのメリットを沢山発見した私たちは、それを周囲にも伝えようと思い、クラスで講演会が行われる際に、クラスメイトに質問するよう勧めたりしました。

さて、今回の私たちの発表のテーマである「PAQ」は、Practice asking question（質問する練習）の頭文字をとった言葉です。そしてなぜチーム名を「名探偵の合言葉」にしたかという、「PAQ」が名探偵になるための合言葉だと考えたからです。質問をする練習をしたことで、私たちは世界のことや目の前にあるものについて、疑問や質問が名探偵のようにどんどん湧いてきました。「なぜ？」という気持ちを

大切に、その「なぜ？」を言葉にする「PAQ」。皆さんもPAQしてみませんか！



【高校生部門】優秀賞

ドリームトリオ（県立高田高等学校） 「学びってなあに？」



【読み書きができないことによる問題】

読み書きできないことで起こる問題には、目的地までの行き方がわからない、薬の用法・用量がわからない、お金の計算ができないことで騙されてしまう、危険を示す標識がわからない、などがあります。実際に南スーダンでは、スーダンからの独立の是非を問う住民投票が行われました。しかし、有権者のほとんどが投票用紙に英語で書かれた独立賛成・反対の文字を理解できませんでした。そのことを利用し、メディアによる投票誘導が行われました。結果、約98%が賛成に投票しました。このように政治参加のときも正しく意思表示をすることができません。最低限の生活をおくるためにも、識字は必要不可欠です。

【世界の識字率】

UNICEFの資料による成人の識字率では、西部・中部アフリカが58%とかなり低く、アジアの中でも南アジアが61%、東アジアと太平洋諸国が94%と大きく差があります。

【識字率の差の背景】

識字率の差の背景には、教育の質、経済的負担、戦争や紛争、早期結婚、児童労働、政治腐敗などがあります。

【解決するために】

私たちにもできることがあります。例えば、青年海外協力隊では、英語の先生や学校建築の手伝いなど、自分の得意分野をいかし活動することができます。また、今すぐ行動できることとして、募金やフェアトレード商品の購入があり、児童労働や貧困問題の解決につながります。他にもあなた自身が考えた自分にできることを実現させてみませんか？

【事前の活動】

高田高校1年生(約240名)に向けて、当日と同じプレゼンをしました。そして、プレゼンの前後で「Q. 国際問題について、あなたにできることはありますか」というアンケートを行いました。「ある」と回答した人はプレゼンの前後で約3割から6割にまで増加しました。国際問題を自分事として考える人が増えたようです。

【学びってなあに？】

私たちのテーマ「学びってなあに？」とはこのようなことです。

1. 知ること(問題やその原因を知る)
2. 考えること(解決方法や自分にできることを考える)
3. 行動すること

学校の授業や日常のニュースで得た知識をそのままにせず、これを読んだ皆さん一人一人が自分にできることを考えて、実際に行動することが、国際問題の解決につながります！私たちが紹介した学びのステップをとりいれてみませんか？



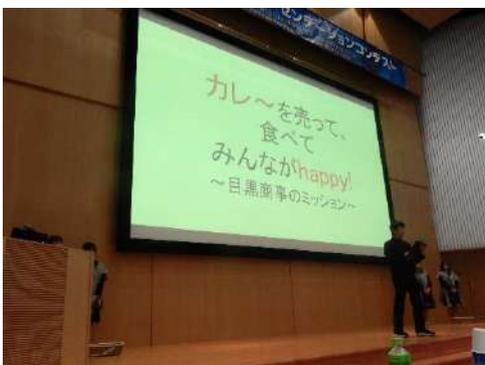
【高校生部門】 審査員奨励賞

目黒商事 三条支店(県立三条商業高等学校) 「カレーを売って、食べて、みんなが happy ! ～目黒商事のミッション～」



私達は、英語の授業で、発展途上国の中には児童労働や、強制労働などの問題があることを勉強しました。現在世界中で約 1 億 6,000 万人以上の子供達が学校へも行けずに、朝から晩まで安い賃金で働いている現状を知り、大変心を痛めました。そこで、そのような状況が少しでも改善されることを願い、商業高校らしいアプローチでフェアトレード商品を広げる活動を行うことにしました。今の日本で、フェアトレードは、まだよく知られていません。そんな中、活動を進めるための、あるヒントを見つけました。

それは、江戸時代、現在の滋賀県で活躍した近江（おうみ）商人による「三方よし」という教えです。三方よしの三方とは「売り手、買い手、地域社会」をさし、その3つの立場を満足させなければならない、というものです。まさに、これはフェアトレードの考えに共通しています。今の世の中では、原料を栽培している売り手の途上国の人々が安い賃金で搾取されています。これでは、途上国の売り手は、まったくよしではないのです。「三方よし」の教えを参考に、地域社会との関係を考えました。そこでつながったのが、三条市のカレーラーメンです。地元三条はカレーラーメンの町としても有名です。さらに、カレーに注目してみると、カレーはいつでもどこでも誰にでも大人気の食べ物です。今でも給食人気NO.1のメニューです。そして、2022年12月には外国人観光客の投票により日本のカレーが、おいしい世界の伝統料理第1位にも選ばれ、外国の人達にも大好評です。食べる買い手にとって、カレーは、ますますよしです。そして、原料となるこのカレーパウダーが、フェアトレード商品として売られていたのです。これを実際に広く販売できれば、途上国の売り手もよしになるはず。つまり、カレーを使えば、カレーを生産する売り手も、カレーを食べる買い手も、地域社会の地元三条も、カレーで町が栄え、カレーでみんなが happy ! になる「三方よし」となるわけです。文化祭では、三条市の惣菜の松井様へ交渉し、フェアトレード製品のカレーパウダーを使った唐揚げとタンドリーチキンを販売することもできました。



目黒商事のミッションは「フェアトレードをトレ」です。将来、すべてのビジネスがフェアに行われ、売り手も、買い手も、社会もみんながハッピーになることを望みます。そして、フェアなトレードが当たり前に行われ、フェアトレードという言葉がもう必要でなくなり、この言葉がトレていく社会を目指して今後も積極的に活動を続けていきます。

【高校生部門】

ガーナとカカオ工場(県立十日町総合高等学校) 「児童労働～ガーナのカカオ生産～」

私たちは不自由なく過ごしていますが、他国ではどのような生活をしているのか気になりました。そこで着目したのは、私たちに馴染み深いチョコレートの生産地であるガーナです。私たちと同年代の子どもたちがカカオ生産で危険な労働を強いられているという現状を知り、衝撃を受けました。そこで、私たちは児童労働の問題に少しでも協力できるように詳しく調べました。

日本はガーナから沢山のカカオ豆を輸入しています。世界第2位のカカオ豆生産地であるガーナには多くの児童労働者がいるとされています。ガーナの人口は 3,218 万人で、そのうち子どもの人口は 636 万人です。その中の 200 万人が働いています。そして、その 200 万人のうち、77 万人がカカオ農家で働いています。この国では家族単位の小規模カカオ農家が多く、小規模ゆえに労働者を雇うことができず、労働力を補うために 18 歳未満の子どもが働いているのです。

特にガーナは、農林水産物であるカカオや鉱山資源の金や原油の輸出に頼っているのが現状です。ガーナにとって、チョコレート産業は経済面や生計面で重要な役割を担っています。原材料として必要不可欠なカカオ豆は世界でも一部の地域でしか収穫できないため、カカオ豆の生産は世界のチョコレート産業に大きな影響を与えることとなります。以前は、政府が豆の品質に関わらず、一定価格で買い取りを行っていましたが、1992 年にカカオ豆の国内取引が自由化され、農民の収入は増加しました。

しかし、子どもたちは学校に行きたくても行くことができず、また医療も充実していない状況です。このガーナのために私たちができることは、「フェアトレードチョコレートを購入すること」です。フェアトレードでは、適正な価格で取引が行われ、生産者や労働者は高い技術・収入を獲得することができます。生産者は、安定した生産をすることができ、育成環境の発達や向上に繋がり、その結果、製品の質が向上します。それは、開発途上国の生産者をサポートすることに繋がるのです。

私たちは、まず、児童労働の現状を多くの人に知ってほしいのです。児童労働を他人事だと思わず自分に何ができるかを考えましょう。そして、カカオを生産している子どもたちが危険な労働を強いられずに安心・安全な生活を送れるように、フェアトレードチョコレートを購入することや募金をするなど、今すぐ行動に移せることから始めていきましょう。そしてまた新しいことを知る、というこのサイクルを意識して行動していきましょう。



【高校生部門】

台湾行こう ^ v ^ の会 (県立糸魚川高等学校) 「世界の果てまで行って食うー！ ～各国の主食スペシャル～」



私たちが選んだテーマは、日本と世界の主食文化についてです。近年日本では深刻な米離れが進んでいます。そんな中で同じような主食の問題が世界にもあるのか気になったため、調べてみることにしました。調べた中で、あまり知られていない特徴を持った国に焦点を絞っていくつかまとめてみました。

ひとつ目はインドです。インドといえばカレーのイメージが強いですが、実は主食としてはあまり頻繁に食べられているわけではありません。インドでは北部ではナンやチャパティが、南部では日本の米より細長いインディカ米が主食として主に食べられています。その理由は、インドの北部は寒冷で小麦が栽培しやすく、南部は温暖で稲が栽培しやすいからです。

二つ目はペルーです。ペルーは高山地帯で富士山の標高を超えている地域もあります。そんな過酷と思われる地域で育てられて、食べられている主食は、ジャガイモです。本当にこんな地域でジャガイモが栽培できるのかと思いますが、しっかりと理由があります。それは、高山地帯に生息する野生動物「ビクーニャ」の糞に含まれる栄養素がジャガイモの成長を促進させるからです。

三つ目はグリーンランドです。この国は非常に特殊で、アザラシの肉や魚などを主食として食べることがあるそうです。グリーンランドは北には北極海、東にはグリーンランド海、南には大西洋と海に囲まれた島国で、主食となる穀物が育ちにくいことと、昔から狩猟が盛んだったことでこのような珍しい主食が食べられるようになったのです。

上記で説明した以外にも世界には様々な主食がまだまだあります。そして、ほとんどの国の主食に共通して言えることは、主食は「地産地消である」という事です。主食は私たちが生活をする上でのエネルギーの中核となる大切な存在であるため、自分達でまかなっておく必要があるのです。ですが、今世界では地球温暖化によって干ばつや豪雨などの異常気象が頻発しています。そしてこれらによって世界各地で主食の原料となる穀物が深刻な被害を受けています。日本も例外ではなく、今年は異例の暑さで稲が不良となる地域が多くありました。このような状況が今後続いてしまうと、今まで当たり前に使っていた主食が満足に食べられなくなるかもしれません。

とても身近で、当たり前のように感じられる主食。それを未来に受け継ぐためには私たち一人ひとりができる事をしていかななくてはならないのではないでしょうか。



【高校生部門】

Bamboo（県立村上中等教育学校）

「Yo! You! ～Which do you wanna buy?～」



今回の国際理解教育プレゼンテーションコンテスト

で、私たち村上中等教育学校は、環境問題に取り組む上での「心の余裕」に焦点を当てた発表をしました。私たちがこのテーマにしたきっかけは、物価高や円安などの経済面で日本が苦境に立たされているというニュースを日頃からよく目にし、そういった経済難のなかでも人々が環境問題に積極的に取り組む世の中の形成にはどのようなことを行う必要があるのか、今現在具体的にどのような事が足枷となっているのかを探求したいと考えたからです。

まず私たちは加速し続けるインフレを食い止めるために政府がすべきことについて考えました。公共の授業で日本の戦後の経済復興について学んだ際、インフレは世の中に出回っているお金の量が多すぎる状況だと学びました。そこから政府の財源について調べ、現在の日本には無駄なことにかけている税金が多いと感じ、私たちなりに減らすべき税金をあげました。納める税金が減ることは国民の負担を大幅に軽減させ、その分のお金を環境に良い商品に使えるため、税金の負担軽減は国民の「心の余裕」を生み出すために必要不可欠だと考えました。私たちは直接税金の配分や使い先を決めることはできませんが、私たちを代表して安心して任せられる政治家を選ぶことができるという権利があります。ただ闇雲に政治を批判し行動を起こさないのではなく、日々政治に関心を持ち自分達にできることは何かを模索することが大切だと思いました。

次に、選挙権がない私たち中高校生や、経済面での余裕がない層でもできることは何かを考えました。ペットボトルのリサイクルやリサイクルボックスが設置されているブランドで衣服を購入することは私たちにできることの良い例です。また、近年では海外の激安サイトのブームにより海外産の衣服を購入する人が圧倒的に増加しました。海外で生産されたものを日本に搬送する過程には沢山の二酸化炭素の排出や枯渇資源を原料とした燃料の消費が伴います。こうした背景があってもこのようなサイトの規模は今後さらに拡大していくでしょう。サイトを利用することは否定しませ

んが、捨てる前に雑巾として再利用したり、まだ着られるうちに廃棄したりしないなど自らの手に渡った後に出来るだけ環境負荷を減らす努力が必要だと考えました。

一つひとつを見ると些細なことではありますがそういった小さな努力の積み重ねが私たちの明るい未来に繋がって行くと思います。



【高校生部門】

GLOCAL 部（県立燕中等教育学校）

「言葉の壁～気持ちがあれば誰にでも～」



私達は昨年、学校の海外研修でオーストラリアに行きました。オーストラリアに行く前や、現地に到着した直後など、大半の生徒が自分の英語がオーストラリアの人達に通じるかどうか、“言語の壁”を感じていました。しかし、日が経つにつれ、私達は英語がうまく話せなくても、オーストラリアの人達とコミュニケーションを図りたいと思うようになり、勇気を出して積極的に話をするようになりました。すると、会話はなんとか成立しました。この経験から、私達は海外の人とコミュニケーションを図るために必要なのは言語だけではない、伝えたいという気持ちなのだ、ということに気づくことができました。

“言語の壁”というのは、心の中に自然とできるものではなく、私達の不安な心が作っているものだと、私達は考えます。海外研修の時も、相手は優しく、笑顔で気さくに話してくれていたにも関わらず、こちらが壁を感じていたせいで、話しづらくなっていました。

私達は外国語によるコミュニケーションだけでなく、日本語によるコミュニケーションでさえ、人と人の中に“言語の壁”を作っているのではないかと考えました。例えば、手話や点字です。言葉をお話せる人にとって、耳や目が不自由な人と会話することは難しいのではないかと先入観があります。そこで私達は、自分と自分の心の中にある壁をなくそうと考え、「全国高校生手話パフォーマンス甲子園」に出場しました。この大会は、全国の高校生が手話を用いた劇やダンス、スピーチなどを通じて、耳が不自由な人達にメッセージを送るというものです。私達は実際に手話を使ってみることで、耳が不自由な人達にもメッセージを伝えたいという気持ちを持つことができました。

ところで、“言語の壁”を作らないために、私達は言語を学ぶしかないのでしょうか？そんなことはありません。伝えたい、話したい、という強い気持ちさえあれば、誰でも、誰とでも、コミュニケーションを図ることができるはずです。相手が自分の言葉と異なる言語を話していても、あきらめずに話し続け、会話し続けていくことが重要です。互いの文化に対する理解を深めることで、自然と距離が縮まり、“言語の壁”はなくなるでしょう。“言語の壁”がなくなることで、私達は異なる言語を話す人達を快く受け入れ、共生していくことができます。私達の明るい未来のために、少しずつ壁をなくしていきましょう。



【高校生部門】

北越高校 English Club (北越高等学校)

「“Make Up” Your Mind! -校則でメイクを許可すべきか-」



ほとんどの学校で化粧は校則で禁止されていますが、それはなぜでしょうか。私たちは、クラブの活動でリサーチした上で、議論してみることにしました。

まず、化粧品販売のトレーナーの方にお話をうかがいました。そこでは、メイクによって自信がついたり人を笑顔にしたりできる一方で、校則で禁止されていてもプライベートの時に思い切りメイクできるから楽しいのかも、などの視点を頂きました。次に学校の ALT の先生に「アメリカの高校では、たしかに化粧のルールはなかったけど、もし日本でメイクが OK になったら、メイクをしなければならないという圧力を感じてしまうかも」という話も聞きました。ノルウェーに留学している先輩からは、「現地の高校生は、メイクや服装には特に決まりはなく、皆自由で、個性の表現という意識がある」と聞きました。

そして、実際に「校則で化粧を許可すべきか」についてディベートを行ってみました。その内容は、次のようなものになりました。

賛成派主張：学校は、化粧を許可すべき！化粧により、自信を持ち、積極的になれる。

反対派反論：「自信をもてる」と主張をしていたけど、むしろトラブルが増える。例えば、化粧品を友達の中で強要したりなど、いじめの原因にもなりかねない。

反対派主張：化粧は、学習環境に悪影響を与えてしまう。時間がかかって遅刻したりする人も増えれば、勉強の雰囲気は害される。

賛成派反論：学習環境が悪化する、と言っていたけど、非合理的なルールがある方が、よほど個人のモチベーションに悪影響がある。個性の発揮を妨げている。

反対派総括：「環境」こそモチベーションに影響する。例えば、化粧が OK になれば、地域からも厳しい目で見られるようになるかもしれない。また、納得できないルールにも、慣れておく必要もあるのではないかな。

賛成派総括：理不尽なものにも、慣れておく必要がある」という考え方が危険！自分たちで変えていく姿勢こそ必要なのではないかな。



今回ディベートをしてみて、賛成側の人は、化粧が OK になったらどんな問題が起こるか想像でき、反対側の人も、「自分たちで考えて決めていく」ことの大切さに気づけたとのこと。また、先生方も、単に「校則だから」「自分たちの時代からそうだったから」ではなく、議論をすることの大切さに気づいたとのこと。だから、心を決めて、始めてみよう！化粧について議論することを！Make up your mind to discuss it together!

【高校生部門】

上越高校 柔道部（上越高等学校） 「ハグは柔道を救う。」

私たちの柔道は「勝つ」ことがすべてです。勝って自分のやってきたことを証明したいと思って頑張っています。ですが、これから柔道はどうなってしまうのだろう・・・という不安があります。「強くなりたい」、という思いから、オーバーワークが原因となる怪我が多くあり、行き過ぎた指導やパワハラなどもあります。その結果、柔道は「怖い、危険である」というイメージが強くなりました。

私たちは幸運にも今回、ドイツへ柔道遠征に行くことができました。ドイツ柔道の現状は日本と全く違い、競技者人口がとても多いです。そこには多くの柔道家を育てるたくさんの工夫がありました。ドイツではいろいろな目的を持って取り組んでいる柔道家がいます。私たちもそうでした・・・みんないろいろな目的を持って柔道を始めたのです。

ですが、高校生になるころには「試合に勝つ」ことだけが目的となってしまいました。「勝つこと」が目的ではない仲間は・・・柔道をやめて行きました。私たちはいつの間にか「試合に勝つ」ことを目指さない、価値観の違う選手を認めなくなっていました。

ドイツ柔道から学んだことは、「価値観の違いを認める」ことです。宗教上の理由でヒジャブを着用しながら柔道を志している選手がいました。ルール上、試合に出られません。しかし彼女は「試合に出られなくても柔道は楽しいし、黒帯も欲しいから」と言っていました。

また、国際大会に出場する強豪選手もいました。本当に強くて、ずっと投げられっぱなしでしたが、「練習相手として大切にされている」と感じられるスキンシップがたくさんありました。価値観が違って、多くの柔道家が同じ環境で「相手選手を思いやる姿」に心打たれました。ドイツの柔道家は「自分の目的を達成するため周りを理解し、自分を理解してもらおう」という姿勢を持っていました。それを伝える手段がスキンシップ（ハグ、握手など）です。礼だけではなく、相手に対する敬意をスキンシップでわかりやすく伝えることが大切だと感じました。

私たちは、日本の柔道家たちに、この思いを伝えて行きます。



日本の文化はあまりスキンシップを好みません。柔道だけでなく、日常生活においても、スキンシップによるコミュニケーションがもっと普及すれば、いじめなどの人間関係のトラブルが少なくなるのではないのでしょうか。

ハグは柔道を救う！いいえ！ハグは世界を救うのです。

II. 台湾スタディツアー

1. 台湾 スタディツアー 概要

◆日 程：令和6年3月25日（月）～令和6年3月29日（金）

◆参加者：計13名 ※学年は令和6年3月現在

【中学生部門 最優秀チーム】新潟市立白井中学校「白井中学校」

片野 ゆら（3年）、栗賀 亜門（3年）、田中 沙瑛良（3年）、

鳴澤 颯（3年）

小出 秀人（教諭）

【高校生部門 最優秀チーム】新潟明訓高等学校「地球人」

笠原 瑞歩（2年）、中島 菜乃加（2年）、本図 幸大（2年）、

牧井 智生（教諭）

【事務局】（公財）新潟県国際交流協会

村山 雅彦（専務理事兼事務局長）、鈴木 仁美（主事）



◆行程表

日程	場所	交通	時間	内容	食事
1日目： 3月25日 （月）	新潟 新潟空港 台湾桃園国 際空港 台北	IT229 専用車	17:40 19:40 22:40	新潟空港集合 （チェックイン次第、出発式へ） 新潟空港発 台湾桃園国際空港着～現地係員合流 ホテルへ移動 ＜桃園泊：桃園城市商旅＞	夕：○ （機内）
2日目： 3月26日 （火）	高鐵桃園駅 嘉義駅	専用車 列車 専用車	朝 8:43 9:50 10:50 15:00	ホテルチェックアウト後、桃園駅へ 桃園駅発 嘉義駅着 烏山頭風景区視察（烏山頭ダム等） 嘉義県立永慶高級中学訪問 学校交流 ＜嘉義泊：棒棒積木飯店＞	朝：○ （ホテル） 昼：○ 夕：○
3日目： 3月27日 （水）	嘉義 台中 高鐵台中駅 台北駅	専用車 列車 専用車	8:45 13:39 14:32	ホテルチェックアウト後、台中へ移動 台中市内旧跡視察 台中駅 台北駅 台北市内文化施設等視察 （故宮博物院等） ＜台北泊：同一飯店＞	朝：○ （ホテル） 昼：○ 夕：○
4日目： 3月28日 （木）	台北郊外	専用車	終日	台北郊外視察 ＜台北泊：同一飯店＞	朝：○ （ホテル） 昼：○ 夕：○
5日目： 3月29日 （金）	台北市内 台湾桃園国 際空港 新潟空港	専用車 IT228	午前 12:30 14:35 18:40	台北市内視察 台湾桃園国際空港チェックイン 台湾桃園国際空港発 新潟空港着～解散	朝：○ （ホテル） 昼：機内

◆主な研修地

烏山頭ダム

台南市官田、大内、六甲及び東山の間に位置するシラヤ国家風景地区の一つ。1920年から1930年まで10年の歳月を経て竣工された、嘉南平野の農業灌漑を主目的としたダム。上空からは珊瑚のように見えることから、「珊瑚潭」と呼ばれることもある。建設を監督した日本人技師八田與一氏の名に因み、「八田ダム」の名でも知られる。農地面積9万ヘクタールの嘉南平野は、このダムの建設による灌漑で台湾最大の穀倉地帯となった。八田與一氏は56歳で亡くなるまで台湾に大きな貢献を果たし、日台友好の象徴となっている。



嘉義県立永慶高級中学

台湾南部の嘉義県にある2009年に創立された中高一貫校。IT教育や、国際的視野を拓くために英語教育に力を入れている。オンライン交流、日本への教育旅行などの国際交流イベントも頻繁に行っている。

故宮博物院

ルーヴル美術館、メトロポリタン美術館、エルミタージュ美術館と並び称される、世界一の中国美術工芸品の宝庫。代表的な所蔵品として「翠玉白菜」や「肉形石」などが有名。生徒たちは、明代から清代にかけて発展した象牙や犀の角の彫刻、宋代に完成期を迎えた優美な白磁、青磁に目を奪われていたようだ。



野柳地質公園

台湾北海岸に1,700メートルにわたって細長く突出した岬。公園では、一千万年に及ぶ旺盛な地殻運動、海蝕・風蝕の影響を受けて様々な形となった奇岩の数々を見ることができ、北部台湾を代表する景勝地。女王頭（クイーンズヘッド）、キャンドル岩、仙女のサンダル岩などのユニークな奇岩群が立ち並ぶ。これらの形態は完成形ではなく、現在も変化を続ける形成の過程であることが感じられる。つい我を忘れて写真撮影に没頭する生徒たちの姿が見られた。



2. 研修日程について

3月25日（月）

- ・新潟空港に集合後、出発式を開催。多くの参加者のご家族も同席し、旅行会社から出入国手続きに必要な書類等に関する説明を受けた。新潟県国際交流協会 中山輝也理事長の挨拶の後、参加者が自己紹介や研修に向けての抱負などを発表した。タイガーエア台湾で新潟空港を出発した。
- ・台湾桃園国際空港到着。日本との時差はマイナス1時間。到着ロビーで現地ガイドと合流後、専用車で空港近隣のホテルへ向かった。



3月26日（火）

- ・ホテルで朝食後、専用車で桃園駅へ向かった。桃園駅から台湾高速鉄道（高鐵）に乗り、台湾中部に位置する嘉義駅へ。オレンジ色のラインが際立つ外観の新幹線だった。日本の新幹線技術が導入されており、日本と変わらず、快適な乗り心地だった。桃園駅から嘉義駅は約1時間で到着した。
- ・嘉義駅に到着し、専用車にて嘉南平野東方の山地にある烏山頭ダム（通称八田ダム）へ向かった。このダムは、日本統治時代、台湾総督府から派遣された日本人土木技師 八田與一氏により建設され、当時不毛の大地だった嘉南平原を台湾最大の穀倉地に変えた。
- ・烏山頭ダム到着。現地ではダムの概要を紹介する日本語版の動画を視聴し、管理事務所の毛所長より直々に八田技師の功績等について直接話を聞くことができた。また、烏山頭風景区内の諸施設も案内してくれた。車窓からは八田技師が作った水路等が見え、今の台湾の景色や生活につながる八田技師の功績を感じることができる。八田技師は大学卒業後台湾へ渡り、台湾の水利建設に人生を捧げた。その多大なる貢献により「嘉南大圳の父」として尊敬されている。広大な敷地内には、八田技師の記念館のほか、4棟の歴史的建築物が復元されており、ダム建設当時の八田技師や工事関係者の宿舎がありのままに再現されている。
- ・昼食後、専用車で嘉義市の嘉義県立永慶高級中学へ。道中の車内では、ガイドから挨拶や自己紹介等を教わり、各自が交流にむけて話すこと等を準備していた。



- ・到着すると、生徒約20名と学校長が出迎えてくれ、学校内で歓迎式が行われた。歓迎会ではゆるやかに生徒同士の交流がスタート。最初は緊張感が漂う空気だったものの、徐々にリラックスして交流していた。続いて場所を移動しタピオカミルクティー作りが行われた。料理する際も英語やジェスチャーを使い、お互いが伝え合っていた。約2時間と短い時間だったが、帰り際のバスでは別れを惜しむほどに、自然と仲が深まり良い思い出となったようだ。
- ・台湾での最初の夕食は北京料理。名物料理の北京ダックを食べた。

3月27日（水）

・ホテルで朝食後、嘉義から台中へ専用車で移動した。
・まず、台中刑務所演武場に訪れ、警官が柔道や剣道を練習していた道場等を見学した。その後訪れた宮原眼科も統治時代の建造物である。眼科医・宮原武熊氏が開業した病院だったが、現在は人気スイーツ店になっている。続けて、赤レンガの歴史的建造物である台中駅旧駅舎にも立ち寄った。



・昼食に郷土料理を食べた後、台湾高速鉄道で台中駅から台北駅へ。
・台北到着後は、専用車に乗り換え、総統が執務する公邸である総統府を車窓から眺めた後に正面で記念撮影。その後、忠烈祠では1時間ごとに衛兵が交代する儀式を見学した。また、行天宮では台湾の祈りや台湾式のおみくじ等の文化に触れた。
・夕食に魯肉飯等を食べた後、ホテルへ向かう前に地元のスーパーや、台北市で最大規模を誇る夜市の1つである士林夜市に立ち寄った。

3月28日（木）

・ホテルで朝食後、専用車で台北郊外へ向かった。まず十分老街を訪れ、赤い灯籠に筆で願い事を書いて空に飛ばす「天燈上げ」を体験した。
・続いて、九份の郷土料理を食べた後、九份老街を見学した。金鉱として栄えていた九份は「黄金山城」とも呼ばれ、かつては金鉱夫が集まり、集落が栄えた名残をとどめている。
・自然の風化や海岸の波による侵食でできた奇岩群が集まる野柳風景特定区へ。浸食を繰り返した岩が女王の頭の形にみえることから「女王頭(クイーンズヘッド)」や「キノコ岩」等、様々な形に変化した奇岩があった。
・夕焼けが有名なスポットである港町、淡水へ。日没直前に何とか間に合い到着し、付近の市場等を歩きながら、淡水で過ごす人々の日常を眺めた。
・台湾での最後の夕食は広東料理。



3月29日（金）



・ホテルで朝食後、専用車にて移動し、中華歴代の至宝を収蔵する世界四大博物館の1つである故宮博物院を見学。中国歴代皇帝の圧巻の宝物群や、石器時代から清朝までの中華文明に触れた。

・タイガーエア台湾で台湾桃園国際空港を出発し、新潟へ帰国の途に就く。5日間ともに過ごしたガイドとも名残惜しい別れとなった。連日活発な交流があった生徒たちただだけに、まだ帰

りたくないといった声があがった。思い出を胸に刻み、それぞれが帰路に就いた。



(渡航後)

- ・帰国後早々の令和6年4月3日、台湾東部・花蓮沖を震源とする大きな地震が発生した。参加者からは、お世話になった方々の安否を心配する声があがった。その後、連絡がとれた関係者の無事を確認した。また、参加者はそれぞれが日本からできる支援を考え、行動したいと話した。
- ・犠牲になられた方々に深く哀悼の意を表すとともに、被災された多くの皆様方に対しお見舞いを申し上げたい。一日も早く復旧・復興することを願う。

3. スタディツアー 参加者レポート

※学年は令和6年3月現在

世界に1歩

新潟市立臼井中学校 3年 片野ゆら

今回の4泊5日の台湾スタディツアーで私は、異文化についての知識や国際交流の重要性を実際に自分の肌で感じる事ができ、前までの私の世界に対する視野が狭いことを実感しました。また、「国際的とは何か？」と疑問を抱き、それについて特に深く考え直すことが出来たのは、2日目です。

2日目は永慶高級中学の生徒の人と英語でコミュニケーションを取りながら、タピオカを作り一緒に唐揚げを食べました。私は英語が得意ではないので初めは上手く会話をすることができませんでしたが、単語だけで言ってみたりジェスチャーを入れてみたりすることで言語が通じなくても仲を深めることができました。永慶高級中学は国際教育に力を入れている学校で、様々な国の人と交流をしており、実際に私たちも快く受け入れてくださいました。今回の経験から英語でコミュニケーションをとれるようになりたいと強く思い、ただテストでいい点を取るために英語を学ぶのではなく、実際に使う日が来ることを意識していきたいとすることができました。他国の人だからといって、恐怖心や警戒心を抱くのではなく、逆に好奇心を抱いて世界に飛び込んでいくことが国際理解に対して一番大切なことだと思いました。

今回の経験を活かして今後は、様々な文化や国について学び、国際についてより理解を深めていきたいと思えます。そして、自分自身も世界に対して何が出来るのかを考え、行動していきたいと思えました。



自分は新潟明訓高校の幸大さん、菜乃加さん、瑞歩さん、臼井中学校の同級生の顕さん、ゆらさん、沙瑛良さんと台湾に行きました。プレゼンテーションコンテストで優勝できたおかげで台湾研修に行けるわけですが、優勝するまでにつらいことや苦勞もたくさんあったので正直、ご褒美旅行だととらえていました。ですが、楽しかった思い出以上にたくさんの学びがありました。その中でも特に印象に残っているものを紹介したいと思います。



まず、台湾の永慶高級中学の英語力の高さです。自分たちは台湾の永慶高級中学に訪問しました。その際タピオカ作りを通して交流しましたが永慶高級中学の方々の英語力の高さについていけませんでした。特に発音が丁寧で、言っていることの意味を自分がわからなかったらすごく丁寧にわかりやすくもう一度言ってくれました。

次に「大きさ」です。大きさというのはもちろん建物の大きさでもあり、日本の東京と比べても高く大きいビルが並んでいましたし、故宮博物院は僕が見た建物の中でもトップクラスに大きかったです。そのため、台湾では建物の大きさや料理の量に圧倒され続けました。

しかし自分が一番大きさを感じたのは台湾の方々の心の大きさです。台湾の高齢者の方々は日本語をしゃべれる人がいて、道であったおばあさんは笑顔で挨拶してくれました。ガイドの方も台湾の方でしたが、とても優しく気さくな方で「大きな」器をお持ちでした。

最後に、台湾は日本と天候も文化も全く違い、苦勞していないと言えは嘘になりますが、それも逆に良い経験ですし、外国に行けるという経験や外国の学生との交流という貴重な体験は一生の中でもためになる貴重なものでした。また、台湾の歴史も学べたのでまた台湾について学びたいと思いましたし、行きたいとも思いました。

新しい経験

皆さんは「国際交流」と聞くとどんなイメージをもちますか？私はずっと「難しい」というイメージをもち、関わることを諦めていました。ですが、プレゼンテーションコンテストやスタディツアーを経て、「国際交流」ということに少し近づけたと思う出来事が二つあります。

一つ目は、永慶高級中学の訪問です。ここでは主に英語でコミュニケーションをとりました。英語で会話をしたり、英語の説明でタピオカミルクティーを作ったりと楽しみながらも、言語の



壁に突き当たり、思ったように話すことが出来ませんでした。しかし、自分自身の英語力を確かめられ、もっと英語を勉強したいと思えたので、とても貴重な経験になったと思います。英語はどの国でも役に立つ言語なので、高校でさらに学びを深め、グローバルに活躍できる人材に成長したいと思いました。また短い時間で、永慶高級中学の人と友達になり台湾の学校生活について教えてもらい、日本との違いを実感しました。

二つ目は、台湾で食べた料理です。私は初めて台湾料理を食べて、台湾ならではの味を楽しみました。台湾といってもその地域によって味が少しずつ違うので、同じ料理でも違う味を満喫しました。日本とは違う辛さや美味さがあり、食べていて面白い料理ばかりでした。また、香辛料などの独特な味を実際に自分で感じられたことも良い経験になりました。そして、店員さんが日本語で説明してくださったり、ガイドさんが料理の説明をしてくださったりと、台湾の伝統料理を存分に楽しむことができました。

私は初めての海外でわからないことがたくさんありましたが、これから役に立つ新知識をたくさん得ることができたので、このスタディツアーに参加できて本当に良かったです。今回学んだことを生かし、自己研鑽を積みしたいと思います。そして、このツアーを体験させてくださった新潟県国際交流協会の方々に感謝をしたいと思います。

台湾での学び

新潟市立臼井中学校 3年 鳴澤 顕

私は今回、スタディツアーとして台湾に行き、様々な文化や歴史、日本との相違点を学びました。その中でも特に心に残ったことは二つあります。

一つ目は台湾の食文化についてです。台湾のご飯は日本にないものばかりでみんなおいしかったのですが、どの料理店でも自分たちが食べきれないくらいの量の料理をだされていました。これは台湾の昔からの伝統のようなもので、ご飯を残すことで「もう食べきれないくらいおなかがいっぱい」ということを表すためだそうです。この文化は台湾の国民性をよく表していて悪くないと思います。しかし、ご飯を残す、という点ですこしもったいなあと感じました。世界ではフードロス削減を呼び掛けているのにご飯を残す文化があるのは少々時代に遅れていると思いました。



二つ目は言語に関しての違いです。私たちはツアー二日目に嘉義県立永慶高級中学（以下、永慶高校）という学校で交流会を行いました。当然、台湾と日本では話されている言語が違うため、日本語では通じません。そこで私たちは英語で会話をすることにしたのですが、永慶高校の方々は全員が素晴らしい英語力を持っていました。おそらくですが、台湾の学校では語学を大事にしている、それ故の英語力なのだと思います。現在の日本ではあまり英語に対する学習の意識が薄いように思えます。しかし、グローバル化が進み、海外交流が多くなったこのご時世、共通語として英語を学ぶべきだと改めて実感しました。

今回、スタディツアーとして台湾に行き、現地で様々なことを学ぶことができました。個人的には故

宮博物院の白菜が良かったのですが、そのほかにも天燈というランタンのようなものを飛ばしたり、ダムを見学したり、本当に楽しい研修となりました。次のスタディツアーに行く方にアドバイスをするとするならば、服装は涼しい恰好で行けということと、体験したことを忘れないうちに早めにレポートにまとめろ、ということです。

最後に、この台湾スタディツアーを運営してくださった皆様、本当にありがとうございました。

台湾スタディツアーに同行して

新潟市立臼井中学校 教諭 小出 秀人

はじめに、新潟明訓高等学校3名の後輩と牧井先生、新潟県国際交流協会の村山様、鈴木様。本校生徒への過分なるご配慮とお心遣い、感謝の念に堪えません。皆さまのお陰で、本校生徒は生き生きと活動することができました。

今回、スタディツアーに参加した生徒たちは、新潟県代表として、誇りと覚悟をもってツアーに臨んでくれました。烏山頭ダム、学校交流、故宫博物院、野柳ジオパーク、そして、夜市散策等、台湾の生活・習慣・歴史・自然をはじめとする様々なものに触れ、新たな価値観を獲得したように思います。特に印象に残ったのは、嘉義県永慶高級中学での学校交流です。自己紹介からタピオカミルクティー作りまで、お互いの母国語、簡単な英語、そして、表情、ジェスチャーはもちろん、スマホの翻訳機能を巧みに用いて当たり前のようにやり取りしていました。地元の学生と本気で伝え合う姿、理解し合おうとする姿が印象に残っています。同じ世代の生徒が共に過ごすことで、お互いの文化・価値観の違いや共通点を共有し合うという、国際理解教育本来の姿が実現した素敵な時間となりました。積極的に関わり合う新潟の生徒たちから、大人である我々の方が多くのことを学ばせてもらったと感じています。また、日本との違いについて感じる異文化理解の場面は、たくさんありました。現地の人の多くが外食をしていること、トイレのこと、とにかくオートバイが多いこと、農地とは明らかに異なる広大な更地が多いこと、日本で衰退した半導体産業が台湾では世界シェアの6割を超えていること等、君たちはこれらの違いをどのように感じたでしょう。この先、これらのことを知るための時間を持つこともツアーの一部なのだと思うください。台湾で学んだ貴重な体験をこれからの人生に生かしてほしいと思うのと同時に、君たちがこれからも世界中の人々と出会い、関わり合う中で、新たな価値観を創り上げてくれることを願っています。



最後になりましたが、このスタディツアーから帰国して間もない4月3日に台湾東部で発生した地震により犠牲となられた方々に深くお悔みを申し上げるとともに、被災された皆様には心よりお見舞い申し上げます。

スタディーツアーを通して考えたこと

新潟明訓高等学校 2年 笠原 瑞歩

スタディーツアーで様々な経験をし、私が特に印象に残っていることは二つあります。

一つ目は、日本の文化が他国でも受け入れられているということです。現地では学校交流の時間があり、私は対面で英語を話すことが苦手なため、緊張していました。しかし、現地の学生は私の話を一生懸命聞こうとしてくれたり、たくさん話しかけてくれたりしたので安心しました。親しくなった学生との会話を通じて、台湾では日本の流行や文化、食事が受け入れられていることを知りました。自国のことが認められているような気がして嬉しかったです。また、私も台湾の文化について詳しく知ることができ、理解が深まりました。多文化共生の社会で異文化交流、そして異文化理解は大切だと改めて感じました。



二つ目は、食事文化についてです。台湾では食事の際、食べ物が大量に提供され、ほとんど毎食残してしまい、心を痛めていました。実は台湾で食事をもてなされる場合は、客人が食べきれないことで客人を満足させられたと考えられており、基本的に食べきれない量の食事を提供するそうです。日本では残さず食べた方が良いと言われており、私たちの感覚とは真逆の文化に触れてみて面白いなと感じました。また、食品ロスにつながってしまうのではないかという疑問も生まれました。台湾に行く前まで私はこの文化を知らなかったのが驚きました。やはり現地に行って他国の文化に触れることは有意義なものであると感じました。

このようにスタディーツアーでは互いの文化について話し、異文化理解の重要性を再認識しました。しかし、日本人の感覚とは全く違う文化もあり、驚きました。これは日本、台湾間だけでなく、他の国々でも生じることでしょう。他国の文化を完全に理解することは難しいかもしれませんが、互いの文化を尊重する姿勢を見せることで良好な関係性を築けるのではないのでしょうか。

スタディーツアーだから得られたこと

新潟明訓高等学校 2年 中島 菜乃加

今回のスタディーツアーでたくさん学びました。

一つ目は、学校交流です。学校交流は渡航前から一番楽しみにしていました。はじめは相手と言語が違うこともあり、きちんとコミュニケーションが取れるのか少し不安もありましたが、学校に到着すると同時に盛大な歓迎を受けて緊張が解け、全力で楽しめました。特に自由時間では、互いに中国語、日本語、英語を交えて一生懸命にコミュニケーションを取りながら仲を深められました。また、帰国後に発生した台湾震源の地震時には、学校交流で仲良くなって連絡先を交換した十数名の友達と連絡を取ってお互いに心配し合うなど、とても良い関係が続いています。このような現



地の人との繋がりは普通の海外旅行では得られないものであり、スタディーツアーならではの醍醐味だと思います。

二つ目は、文化の共通点と相違点です。台湾は同じアジア圏ということであまり文化や過ごし方の違いなどは想像がついていませんでした。実際に台湾に行ってみると、街の至る所に日本語の看板や日本発祥の馴染みのあるお店があったり、日本語が話せる店員さんや運転手さんがいたり親日国という歴史を何度も体感しました。そのため最初のうちは外国に来ている実感すらあまり持てませんでした。しかし、日本との違いに驚く場面もたくさんありました。例えば食事。台湾での食事は朝昼晩どれも量が多い上に、次々とお皿が運ばれてきて、毎日お腹がはち切れそうでした。それでも、この五日間で食べた食事は本当に全部美味しく毎日食事の時間が楽しみでした。

まだまだ書きたい思い出がたくさんあります。移動時間、待機時間なども台湾の景色を見たり、ガイドさんの解説を聞いたりして、台湾のスタディーツアーでしかできないことを経験できてとても楽しかったです。また、現在はいろんなオンラインツールを使ってグローバルな視点を養うことができる時代ですが、実際に自分が海外に行ってみないと見えないものがほとんどだと感じました。この経験から今後もっと海外に目を向け、グローバルに活躍したいと思う気持ちが強くなりました。

感動から得た学び

新潟明訓高等学校 2年 本図 幸大

私にとって今回のツアーは感動の宝庫でした。特に印象的だった二つを紹介します。

一つ目は共通の文化の素晴らしさに触れた時の感動です。異文化交流は非常に難しいと個人的には思います。なぜなら言語も、文化も、もしかしたら感性すら違う人々と交流するからです。嘉義県立永慶高級中学では、そんな状況の中、交流が深められるか不安に思っていました。しかし、永慶高級中学の高校生が日本の漫画や音楽といった共通文化の話題をあげてくれ、それが私と彼らの心を繋いでくれました。台湾の高校生が日本の文化にアンテナをはっていてくれたからこそ、私たちのコミュニケーションは成功したと思います。この出来事を通して、国の違いを超えて人々を結んでくれる共通の文化の有意性を実感し、感動しました。そして、永慶高級中学の高校生がそうしてくれたように、これからは異文化交流の第一歩として、まず日本にもある異国の文化を理解しようと思いました。

二つ目は知識を活用できた時の感動です。故宮博物院では、学校で学んだ知識を実際に見て感じたり、深めたりすることができました。具体的には、興味はあったけれど教科書でしか見たことのなかった青磁や白磁、陳さんの解説を聞いて理解できた「壁」の形に隠された意味などが挙げられます。今まで博物館で気分が高揚したことはなかったのですが、知識があると本当に見える世界が違って、今回は興奮がおさまりませんでした。知識が「見る世界」を豊かにしてくれることに感動するとともに、その重要性を改めて実感しました。



上記二つをはじめとして、今回の国際プレゼンとスタディーツアーでは多くのことに感動し、学ばせていただきました。今後は、日常生活や学校行事等の身近なことから、将来を見据えた、プレゼン、国際的な仕事、行事に関わることまで幅広いことにこれらの学びを活用していきたいと思います。

このような貴重な機会をくださった方々に心から感謝申し上げます。

「リアル」の重要性

新潟明訓高等学校 教諭 牧井 智生

まず今回の台湾スタディーツアー実施に向けてご尽力いただきました新潟県国際交流協会の皆様、そして現地でのガイドをしてくださった陳様はじめ関わってくださった皆様に心より御礼申し上げます。一方で我々のツアー後4月3日に地震が台湾を襲いました。現地で交流があった方々は無事と聞き安心はしていますが、被害に遭われた方々にお見舞い申し上げます。

さて今回のスタディーツアーは新型コロナ明け最初の実施となりました。引率として私も帯同させていただき、さまざまな場面で感じたことは「リアル」の大切さです。ある意味新型コロナのおかげで、オンライン整備が加速し、オンラインでのコミュニケーションも進みました。実際にスタディーツアーの事前説明会もオンラインで行われ、生徒同士の顔合わせや台湾語研修もあり、有意義な時間でした。しかし台湾への出発当日、本校生徒と臼井中学校の生徒の皆さんがすぐに打ち解ける姿をみて、最初の「リアル」の良さを感じました。中身の濃い研修ができそうだと確信し、実際にその通りでした。

続いては嘉義県立永慶高級中学での学校交流です。先生方や生徒の皆さんによる温かい歓迎も相まって、新潟の生徒たちもすぐに永慶高級中学の生徒の皆さんと英語やジェスチャー、事前に用意していたけん玉や折り紙を通じて楽しそうに交流する姿がありました。タピオカミルクティー作り体験時や自由時間にはお互いのSNSを交換する姿もありました。台湾滞在中、そして帰国後も生徒たちがメッセージのやり取りをしている様子を見て、とても嬉しく思いました。地震後も安否確認をすぐにしていたようです。直に顔を合わせたもの同士だからこそ、より相手に関心を持ちます。オンライン上の出会いだけではない姿と言えるでしょう。私自身も永慶高級中学の郭校長先生とお話する中で、将来的な学校間の交流についてもお話をすることができ、とても有意義な時間でした。

他にも親日国として知られる台湾ですが、街の至る所で目にする日本企業や日本車の多さ、日本語を堪能に話せる方が大勢いることから親日ぶりを直に感じることができました。また解散式での国際交流協会事務局長の村山様のお話「皆さんが台湾で目にしたものが、実際の台湾である」とあったように報道からできるイメージではなく「リアル」な台湾の姿を生徒たちは感じ取ってくれたことでしょう。

国際理解教育プレゼンテーションコンテストに向けた準備、朱鷺メッセ国際会議室（マリンホール）という素晴らしい会場での発表、そして今回のスタディーツアー。すべてが生徒にとって世界を肌を感じ、成長する素晴らしい機会です。本校生徒含め、新潟県のより多くの子どもたちがこの機会に出会えることを期待しています。



III. 付録資料

新潟から世界へ翔ける！ ～あなたが知ったこと、行動することを伝えよう！～
令和5年度 国際理解教育プレゼンテーションコンテスト
実施要項

1 開催要領

(1) 趣 旨

国際化が加速する現在、多様な文化や価値観を持つ人々が互いに認め合い、支え合って生活する多文化共生社会の構築とともに、国際平和のために主体的に物事を考え、積極的にコミュニケーションを取ることができるグローバル人材の育成が重視されています。

よりよい国際社会の実現に向け、高い国際意識とコミュニケーション能力を身につけた若者の育成や、県民の国際理解の推進を図るため、県内の中学生・高校生自らが国際理解に関して自由な発想で率直に発表を行うプレゼンテーションコンテストを開催します。

(2) 主 催 公益財団法人新潟県国際交流協会、新潟県国際理解教育推進協議会^{※注}

(3) 開催日時 令和5年12月9日(土) 12:00～17:00(予定)

※開催時間は変更になる場合があります。

(4) 会 場 朱鷺メッセ 国際会議室(マリンホール)(新潟市中央区万代島6-1)

(5) 実施部門 次の2部門で行います。

- ① 中学生部門
- ② 高校生部門

(6) 表 彰 部門ごとに、次の賞及び副賞を贈呈します。

- ・ 最優秀賞 1チーム：海外スタディツアー
- ・ 優秀賞 2チーム：賞状・図書カード(3万円分)
- ・ 審査員奨励賞 1チーム：賞状・図書カード(2万円分)

(7) 観 覧 詳細は開催1か月前までにホームページ等で発表する予定です。

2 応募要領

(1) 応募条件 学校・地域組織など(以下「団体」という)による応募、個人による応募のいずれの方法でも受け付けますが、1団体からの応募は各部門3チームまでとします。また、応募には、次の全てを満たすチームであることが必要です。

- ・ 新潟県内の中学校・高等学校(中等教育学校、高等専門学校、特別支援学校を含む)に在籍する生徒3名以上5名以内で構成するチームであること。
- ・ チームには満20歳以上の指導者(教員等)が1名以上含まれていること。

(2) 発表内容

- ・ 国際理解に関連することであればテーマと内容は自由であるが、生徒自らの問題意識に基づいて主体的に考えた発表内容であること。
- ・ 生徒自らが十分な調査・研究を行い、課題解決へ向けた考えを論理的に発表すること。
- ・ 学校での学習、クラブ活動、地域での活動などの成果について発表すること。
- ・ 発表の形態は自由であり、聴衆にメッセージを率直に伝えること。
- ・ 発表は生徒のみで行うものとし、指導者は登壇やパソコン操作などの関与を行わないこと。

(3) 発表に際しての留意事項

- ① 発表時間は8分以内とする。
- ② 発表に使用する動画、インタビュー等の音声データの使用時間は各1分以内とする。
ただし、BGMとして使用する場合はこの限りではない。
- ③ 写真・イラスト、動画、音声等の使用に際しては、著作権、肖像権など他人の権利を侵害しないこと。
- ④ 日本語以外の言語での発表も可能であるが、訳文や資料などの配布は認めない。発表者自身がメッセージを伝える工夫をすること。

※①および②の制限時間を超過した場合は、審査で減点されます。

応募に際し、必ず「国際理解教育プレゼンテーションコンテスト」特設サイト「よくある質問」をご確認ください。https://www.niigata-ia.or.jp/jp/ct/000_precon/faq.html

(4) 審 査 国際理解教育・国際協力活動の専門家等の審査員が審査します。

ア 「最優秀賞」及び「優秀賞」は下記の観点から審査します。配点は、特に①テーマ／コンテンツに比重を置きます。

- ① テーマ／コンテンツ（主題／内容）
 - ・ 生徒自らの問題意識や、主体性があるか。
 - ・ 国際理解を深める明確な意図があるか。
 - ・ 内容が論理的で、聴衆を説得する力があるか。
 - ・ メッセージや行動が具体的で、実行可能性があるか。
- ② プレゼンス／オリジナリティ（発表／独創性）
 - ・ 発表者の意見を、自らのことばで率直に表現しているか。
 - ・ 発表に自信や熱意があり、聴衆へメッセージが伝わっているか。
 - ・ 調査・研究の手法、資料の作成や発表の方法などにオリジナリティがあるか。
- ③ リソース（資料）
 - ・ 十分な量と質の資料が収集されているか。
 - ・ 資料の検討が多角的になされているか。
 - ・ テーマに関連した資料として活用されているか。
- ④ チームワーク
 - ・ チームワークよく発表が行われているか。
 - ・ チームとしての取組みの成果が顕著であるか。
 - ・ 事前の練習の成果が表れているか。
- ⑤ 総合点
 - ・ 全体を通じて強く印象に残る内容の発表が行われたか。
 - ・ 生徒が将来にわたって国際理解を深めていく意欲が感じられたか。

イ 「審査員奨励賞」は、審査項目の得点や順位にかかわらず、今後の展開への期待が高く、特に印象に残った次の①または②のチームの中から選定されます。

- ① 初出場チーム
 - ・ 過去5年間、本コンテストに出場していない団体からのチーム
 - ・ 個人による出場の場合、いずれの生徒も前年度本コンテストに出場していないチーム
- ② 低学年チーム
 - ・ 中学生部門は、1、2年生で構成されたチーム
 - ・ 高校生部門は、1年生のみで構成されたチーム

(5) 応募方法

所定の応募用紙に必要事項を記入し、令和5年9月29日(金)必着で、下記宛に郵送、FAX、E-メールのいずれかで送付してください(応募用紙は新潟県国際交流協会ホームページ、特設サイトからもダウンロードできます)。

(6) 出場チームの決定

- ・ 出場チーム数は、中学生・高校生各部門合わせて最大20チームまでとします。
- ・ 応募が20チームを超えた場合は、書類選考を行います。
- ・ 各部門の応募が5チーム(3団体)に満たない場合は、その部門は開催しません。
- ・ 書類選考の結果は、10月中旬までに応募チーム宛に郵送します。

(7) 応募先・問合せ等

(公財)新潟県国際交流協会 国際理解教育プレゼンテーションコンテスト参加者募集係
住所：〒950-0078 新潟市中央区万代島5-1 万代島ビル2階
電話：025-290-5650 FAX：025-249-8122 E-mail：nia21c@niigata-ia.or.jp
ホームページ：https://www.niigata-ia.or.jp/
特設サイト：https://www.niigata-ia.or.jp/jp/ct/000_precon/

3 その他

(1) 交通費支援について

コンテスト会場までの交通費は、基本的に、各自ご負担いただきます。

ただし、遠隔地からの参加チームには、生徒5名、指導者1名まで、交通費の一部を支援します。

○支援額の算定方法

下記により算定します。

対象	所在地
団体・個人の生徒	学校の所在地
団体の指導者	団体の所在地
個人の指導者	指導者の住所地

○支援額(往復)

地域	金額
新発田市、聖籠町、阿賀野市、五泉市、三条市、田上町、加茂市、燕市、弥彦村、新潟市西蒲区、新潟市南区	500円/人
阿賀町、見附市、出雲崎町、長岡市、村上市、関川村、胎内市	1,000円/人
小千谷市、魚沼市、柏崎市、刈羽村	1,500円/人
南魚沼市、十日町市、上越市	2,000円/人
津南町、湯沢町、妙高市	2,500円/人
糸魚川市、佐渡市	3,000円/人
粟島浦村	4,000円/人

(2) 作品の取扱い

- ア コンテストの写真、ビデオ、発表資料、海外スタディツアーの写真、レポートは、当協会の広報等に利用させていただきます。
- イ 報告書に掲載するため、コンテスト終了後、各チームの発表概要を提出していただきます。報告書は当協会のホームページ等で公開する予定です。

(3) 個人情報保護について

- ア 申込書にご記入いただいた個人情報は、法令及び当協会の個人情報保護規程に従って厳重に管理し、当コンテストの運営以外の目的で使用することはありません。
- イ 出場チームについて、名前・学校名・学年などが当協会の広報媒体や報道機関等が発行する媒体に公開されることがあります。

(4) 海外スタディツアー派遣について

- ア 時期：令和6年3月（春休み期間中5日間程度）
- イ 行き先：台湾（予定）
- ウ その他：以下の点をご承知おきください。
 - ・ 感染症の拡大、不慮の災害等により、派遣を変更・中止する場合があります。
 - ・ スタディツアーの派遣経費は、1チームにつき指導者1名、生徒5名分まで当協会が負担します。派遣者は応募書類に記載された者に限ります。
 - ・ 自宅と集合・解散場所（新潟空港の予定）間の交通費、旅券取得費用、旅行保険料（任意）は派遣者にご負担いただきます。
 - ・ 集合場所から当協会職員が随行するほか、現地ガイドが同行します。
 - ・ 派遣者全員から、帰国後にレポートをご提出いただきます。
 - ・ 最優秀賞の副賞が海外派遣であることから、当コンテストへの応募について保護者の了解を得てください。

※注 新潟県国際理解教育推進協議会構成団体

新潟県知事政策局国際課、新潟県教育委員会義務教育課、新潟県教育委員会高等学校教育課、新潟県立教育センター、新潟市教育委員会学校支援課、独立行政法人国際協力機構（JICA）東京センター、新潟大学、上越教育大学、新潟国際情報大学、新潟県立大学、敬和学園大学、新潟県立看護大学、特定非営利活動法人にいがた NGO ネットワーク、公益財団法人 AFS 日本協会新潟支部、新潟県青年海外協力協会、公益財団法人新潟市国際交流協会、公益財団法人長岡市国際交流協会、公益社団法人上越国際交流協会、公益財団法人新潟県国際交流協会

令和5年度国際理解教育プレゼンテーションコンテスト報告書

2024年7月発行

編集・発行 公益財団法人新潟県国際交流協会

〒950-0078

新潟市中央区万代島5番1号 万代島ビル2階

TEL : 025-290-5650 FAX : 025-249-8122

E-mail : nia21c@niigata-ia.or.jp

URL : <https://www.niigata-ia.or.jp>